札幌市文化財調査報告書

XVII

1977

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書XVII

N199 遺　跡

1977・7

札幌市教育委員会

例　　言

1　本書は，札幌市西区手稲西野に所在する小林秀次氏所有地内の遺跡の発掘報告書である。発掘調査の発端は，小林氏が自所有地に高層分譲住宅を建設するという意向を示めされたからである。

尚，遺跡の地番は，札幌市西区手稲西野 112～114 番地である。

2　調査期間は，昭和 51 年 6 月 20 日～7 月 30 日まで延べ 40 日間であった。

発掘対象面積は，5,600 m²であり，実質発掘面積は，3,500 m²であった。

3　調査は，札幌市教育委員会が主体者となり，現場の仕事は，札幌市教育委員会文化財調査員羽賀憲二を担当者とし嘱託調査員として椙田光明，宮塚義人の協力を得て遂行した。

4　本遺跡の整理作業にあたっては，内山真澄が担当者としてあたった。

5　本書の編集は，内山が担当した。執筆は，加藤，羽賀の両名がそれぞれ分担し，各文末には執筆者名を明記し文責を明らかにした。

6　発掘調査には，下記の人々が従事した。大滝信芳，金井邦彦，酒井洋子，高杉順子，横地桂子，（以上順不同，敬称略）

さらに，北海道工業大学の学生諸君の協力を得た。

7　整理作業について下記の人々の協力があった。

酒井洋子（トレース），池田和子，高杉順子，横地桂子（トレース，遺物整理，実測，原稿浄書）（以上順不同，敬称略）

尚，図版の写真撮影は，羽賀と内山真澄が行った。

8　発掘調査，整理作業においては，下記の機関，人々より協力と助言を賜った。

北海道教育庁振興部文化課

札幌商科大学，札幌市文化財保護審議会委員　大場利夫教授

北海道開拓記念館，野村崇氏

札幌大学，石附喜三男教授

北海道教育大学札幌分校　奈良部理教授

北海道大学，岡田宏明助教授

9　発掘期間中，整理，報告書出版に至るまで「小林秀次氏」「中菱建設株式会社」には，種々の御協力と深い御理解を賜った。

凡　　例

第４章の挿図の凡例は，下記に示した。

：第Ⅰ層　黒色土　　：第Ⅱ層　褐色土

：第Ⅰ′層　黒褐色土　　：第Ⅲ層　茶褐色土

記号　p；土器

目　次

第１章　発掘調査に至るまでの経過 …… 13

第２章　遺跡の位置と環境 …… 17

第３章　発掘区の設定と遺跡の層序 …… 18
　第１節　発掘区の設定 …… 18
　第２節　遺跡の層序 …… 21

第４章　遺構及び遺構出土の遺物 …… 29

第５章　発掘区出土の遺物 …… 39
　第１節　土　　器 …… 39
　第２節　石　　器 …… 45

第６章　ま と め …… 47
　第１節　土壙墓より考えた続縄文時代について …… 47
　第２節　土器について …… 57

第７章　結　　語 …… 68

挿図目次

第１図　遺跡付近地形図（１：25,000）…… 11
第２図　遺跡付近地形図…… 15
第３図　グリッド配置図…… 19
第４図　遺跡地質構造模式図…… 21
第５図　遺跡地質柱状図…… 22
第６図　ａ－ｂセクション図…… 23
第７図　ｃ－ｄ，ｅ－ｆセクション図…… 25
第８図　遺構関連図…… 27
第９図　第１号ピット…… 29
第10図　第１号ピット出土土器拓影…… 29
第11図　第２号ピット…… 30
第12図　第２号ピット出土土器実測図…… 31
第13図　第２号ピット出土土器拓影…… 31
第14図　第３号ピット…… 32
第15図　第４号ピット…… 32
第16図　第５号ピット…… 33
第17図　第６号ピット…… 33
第18図　第７号ピット…… 33
第19図　第８号ピット…… 34
第20図　第９号ピット…… 34
第21図　第10号ピット…… 34
第22図　第11号ピット…… 35
第23図　第12号ピット…… 35
第24図　第13号ピット…… 35
第25図　第14号ピット…… 36
第26図　第15号ピット…… 36
第27図　第16号ピット…… 37
第28図　第17号ピット…… 37
第29図　第18号ピット…… 37
第30図　第19号ピット…… 38
第31図　第19号ピット出土土器実測図…… 38

第32図　発掘区出土土器実測図(1) …… 40
第33図　発掘区出土土器実測図(2) …… 41
第34図　発掘区出土土器拓影 …… 42
第35図　発掘区出土土器拓影 …… 43
第36図　発掘区出土石器実測図 …… 46

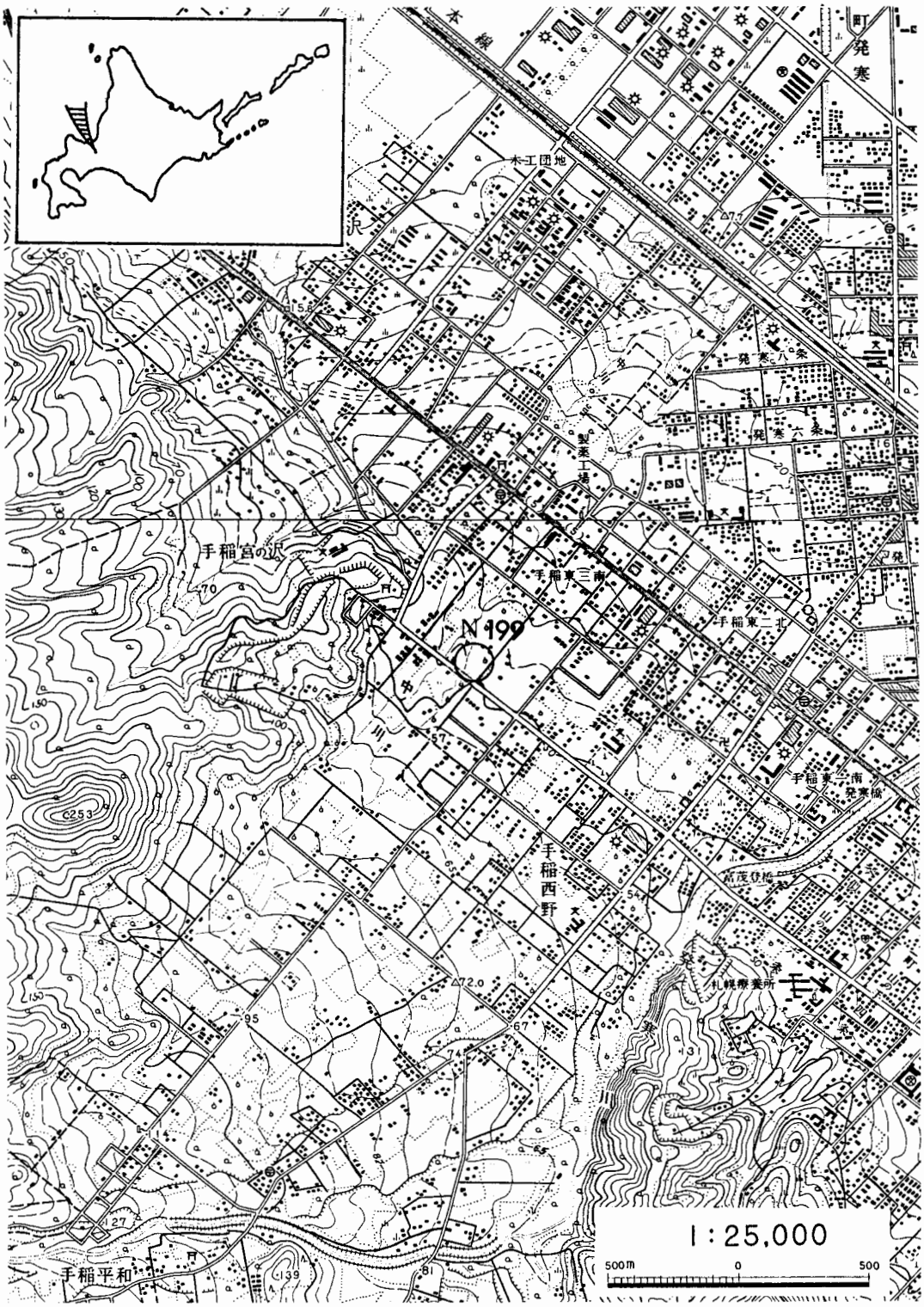
図版目次

図版１　A　遺跡遠景（西より）…… 75
　　B　遺跡遠景（西より）…… 75
図版２　遺跡全景（発掘区配置・発掘状況）…… 77
図版３　A　発掘状況（南より）…… 79
　　B　発掘完了…… 79
図版４　A　発掘区土器出土状況…… 81
　　B　第13，14号ピット（南より）…… 81
図版５　A　第１号ピットセクション（東より）…… 83
　　B　第１号ピット（東より）…… 83
図版６　A　第２号ピットセクション（東より）…… 85
　　B　第２号ピット（東より）…… 85
図版７　A　第３号ピットセクション（東より）…… 87
　　B　第３号ピット（東より）…… 87
図版８　A　第４号ピットセクション（東より）…… 89
　　B　第４号ピット（東より）…… 89
図版９　A　第５号ピット（南より）…… 91
　　B　第７号ピット（東より）…… 91
　　C　第８号ピット（東より）…… 91
図版10　A　第９号ピット（東より）…… 93
　　B　第10号ピット（東より）…… 93
図版11　A　第13号ピットセクション（南より）…… 95
　　B　第13号ピット（南より）…… 95
図版12　A　第14号ピットセクション（南より）…… 97
　　B　第14号ピット（南より）…… 97
図版13　A　第15号ピットセクション（東より）…… 99
　　B　第15号ピット（東より）…… 99
図版14　A　第16号ピットセクション（東より）…… 101
　　B　第16号ピット（東より）…… 101
図版15　A　第17号ピット（東より）…… 103
　　B　第18号ピット（東より）…… 103
図版16　A　第19号ピット（東より）…… 105

B　第19号ピット（東より）…… 105
図版17　土壙墓内出土土器（1，2号，2，19号）…… 107
図版18　A　土壙墓内出土土器（上段1号，中・下段2号）…… 109
B　発掘区出土土器…… 109
図版19　A　発掘区出土土器…… 111
B　発掘区出土土器…… 111
図版20　A　発掘区出土土器…… 113
B　発掘区出土土器…… 113
図版21　A　発掘区出土土器…… 115
B　発掘区出土石器…… 115

挿表目次

第１表　続縄文時代遺跡別石器群組成一覧…… 52
第２表　…… 66
第３表　Ｎ199遺跡土壙墓計測表 …… 72
第４表　石器類計測表…… 72



第1図　遺跡付近地形図

（本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の 2.5万分の1地形図を複製したものである。承認番号，昭51道複626号）

第1章　発掘調査に至るまでの経過

本遺跡は，高層住宅建設に伴なう工事による事前記録調査の目的で実施した。本遺跡を含む一帯は，昭和48年，49年に札幌市教育委員会が実施した，分布調査によりかなり詳細な分布図と遺跡台帳が整備されている。

本遺跡にかかる工事内容が具体的に我々の前に提示されたのは，昭和51年3月のことである。その後，遺跡の現状保存の可能性について，工事施行者と教育委員会との間で，数次にわたり会合が持たれた。しかしながら，人口の集中が著るしい札幌の住宅事情と，土地の有効活用，そして工事地域の建物の構造及び土地の空間面積等の調整から，遺跡の完全な現状保存は困難であり，事前調査もやむなしとの結論に達したのである。

実際の調査の実施にあたっては，工事の関係から，7月中に発掘調査を終了してほしいとの強い要望が示された。しかし，この時期には，すでに教育委員会が実施している大谷地地区の調査と，更に計画中である手稲前田地区の調査があり，これに本遺跡の調査を加えると，同時に3ヶ所の遺跡の発掘調査を進行させなければならず，教育委員会の現有の調査員数では，発掘調査の実施は困難であるという状況にあった。

そこで当時，札幌市教育委員会に時々手伝いに来ていた椙田光明君と，彼の知人である宮塚義人君に調査員として発掘調査に当ってもらうべく要請した結果，両君から快よく承諾をいただき，羽賀憲二を調査担当者として発掘調査を実施することとなった。

本遺跡が発寒川扇状地堆積物によって構成されているために，発掘調査の実施にあたってもシャベル，クワ等器材の破損するものが続出するとともに，加えて，3地域での発掘調査を同時進行させることから，作業員の確保も困難を極めた。ともあれ，このような悪条件にもかかわらず，一応の成果をあげて調査を終了することができたのは，調査員と作業員の一致した協力のたまものである。

また，冬期の整理作業にあたっては，当初予定していた椙田君が，他の調査に参加したために，急拠内山真澄君にお願いをした。

最後に，本調査の実施にあたって土地所有者小林秀次氏及び中菱建設株式会社からは，物心両面にわたる多大な御支援をいただいた。記して衷心より謝意を表する次第である。

（加藤　邦雄）

第２図　遺跡付近地形図

凡例：　：ブルドーザーによる剝土部分

第2章　遺跡の位置と環境

（第１図，第２図）

本遺跡は，札幌市中の西方寄りに位置し，国鉄札幌駅より西方約６ kmの地点で道々西野真駒内清田線沿いにある。

本遺跡をのせる台地は，発寒川による扇状地堆積物により構成されている。

発寒川扇状地は，手稲平和付近より始まり次第にその幅を広げ，国鉄函館本線付近にまで至っている。

遺跡は，発寒川扇状地西側を流れ，手稲山山腹付近より端を発する中川という小河川の左岸にあたる小河岸段丘上にある。

遺跡の南は，三角山，大倉山等の藻岩山系があり次第に高まり山岳地形となって行く。北は，次第に傾斜し，琴似，発寒の平坦な石狩平野が見い出される。

遺跡の面は，北側に向けやや傾斜しており，標高50 mから48 mである。

遺跡を含む地域一帯は，扇状地堆積物が基盤をなし，ひとかかえから人頭大，さらに砂利に至るまでの礫層であり遺跡の条件としては良好とはいえない状況にあった。

さらに扇状地特有の地形として，遺跡の前面を通る道々西野真駒内清田線は，発寒川扇状地を横断しておりこれを１つの基線として考えるならば，発寒川の川床は遺跡が存在する面より若干高いといった特徴がある。

これらの点は，発寒川の上流で多量の雨等が降った場合等発寒川の流れは随時変化し，現在のように河川改修，築提工事等が行われる以前には，遺跡を含む一帯は常時洪水にみまわれていた事が理解される。

本遺跡の発掘よりも，土器破片等明らかに流されて来たものと考えられる磨滅したものもみられる。

本遺跡に於いては，土壙墓とも考えられるピットが検出されている。遺構が構築された時期は，この地域が比較的安定していたと解されよう。

中川は，比較的小さな河川であるが，この流域には多数の遺跡が存在している。時代的には縄文時代前期から擦文時代に至るものがみられている。

（羽賀　憲二）

第3章　発掘区の設定と遺跡の層序

第１節　発掘区の設定

発掘対称区域は，南西方向は道々西野真駒内清田線により，南東方向は市道手稲学田通によりそれぞれ直線的に切られており，発掘対称地域は，100ｍ×50ｍ内外の長方形である為，道々西野真駒内清田線の歩道端部縁石を基線とし，発掘対称地全域を10ｍ×10ｍの網目でおおい発掘区とした（第３図）。

発掘区の名称は，長軸方向にⅠ～Ⅸ区，短軸方向にＡ～Ｆ区とした。

発掘にあたっては，10ｍ×10ｍの発掘区をさらに２ｍ×２ｍの小発掘区に分割し，遺跡全体の様相と遺構の検出の為，発掘対称地域全体の４分の１を発掘した。

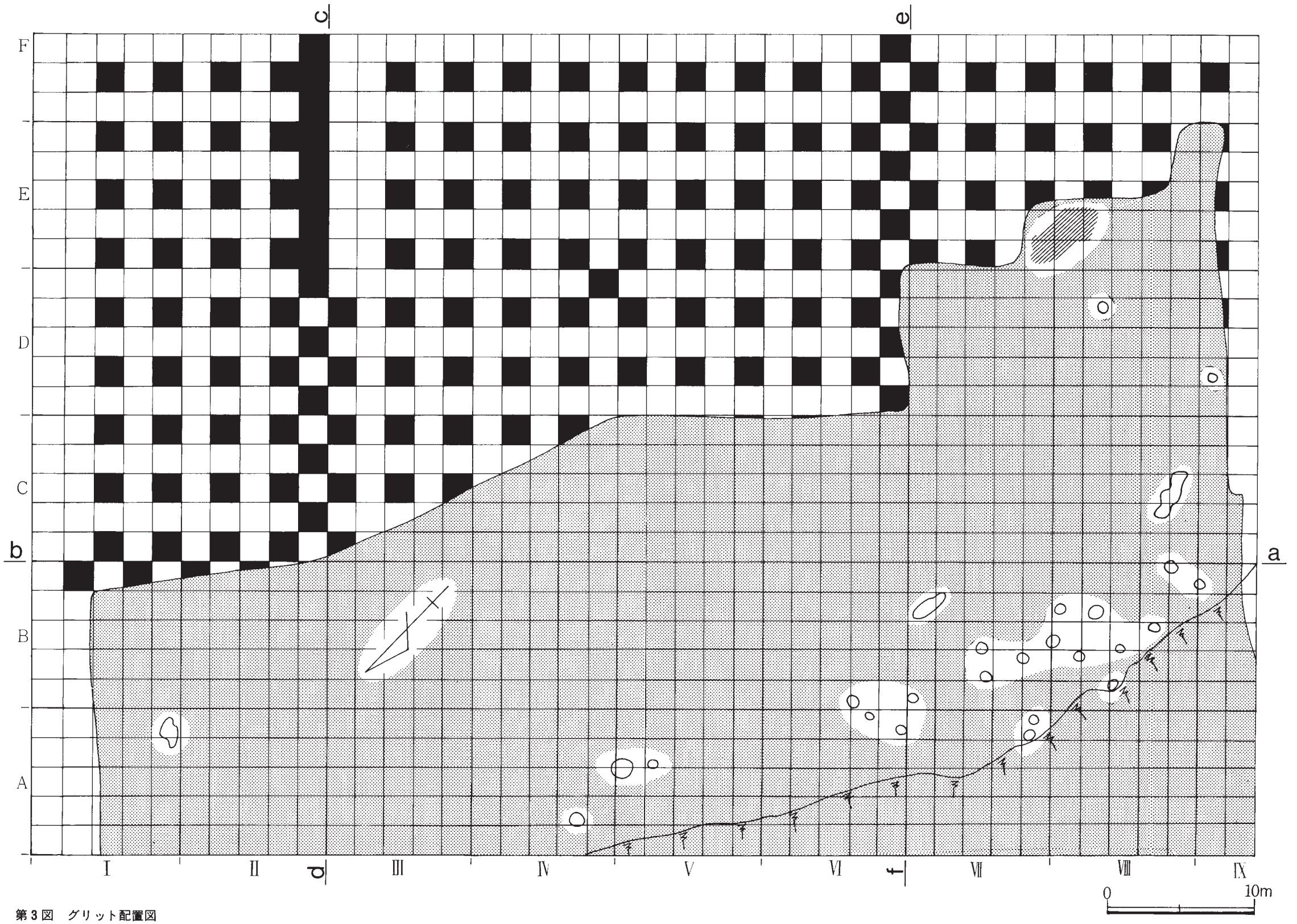
しかし，遺跡の状態は扇状地堆積物が基盤をなし耕作土中にまで人頭大から砂利に至る非常に多い玉石が含まれており，全て人力にて発掘（表土剝土作業）するならば，従来の遺跡の３倍弱の時間が必要であると判断された。

そこで全域の４分の１の発掘が終了した段階で遺構の存在する部分を中心として，機械力による表土剝土作業を導入した（第２図，第３図の網部分）。

発掘対称面積は，5,600 m^2であった。

人力による表土剝土1,200 m^2，機械力による表土剝土，2,500 m^2が最終的な発掘総面積であった。

（羽賀　憲二）



第3図　グリット配置図

第２節　遺跡の層序

本遺跡を含む地域の地質は，新第三紀鮮新世の西野層（集塊岩，礫岩，頁岩）を基盤とし，その上位を第四紀沖積世の発寒川による扇状地堆積物（砂・礫）がおおっている（第４図）。

表土（黒色腐植土）層約 50～60 cm 以深には，すぐに発寒川扇状地堆積物である砂礫層が分布し数十mの深度にまで達している（第５図）。

表土層及びその下層は，人頭大からこぶし大に至る玉石を含む礫層である。遺構は，表土層を剥土し，黄褐色を呈する扇状地堆積物である砂礫層上面にてそのプランが確認された。

遺物は，表土層中に含まれており，扇状地堆積物である砂礫層には全く含まれてはいない。

本遺跡では，長軸方向１本（ａ－ｂ）と短軸方向２本（ｃ－ｄ），（ｅ－ｆ）のセクションラインをもうけ，扇状地堆積物上面までのセクション図を作成してある（第６，７図）。

中川に近くなるにつれ，表土層は厚くなり，また表土に含まれる玉石等の礫も少なくなる傾向がみられる。

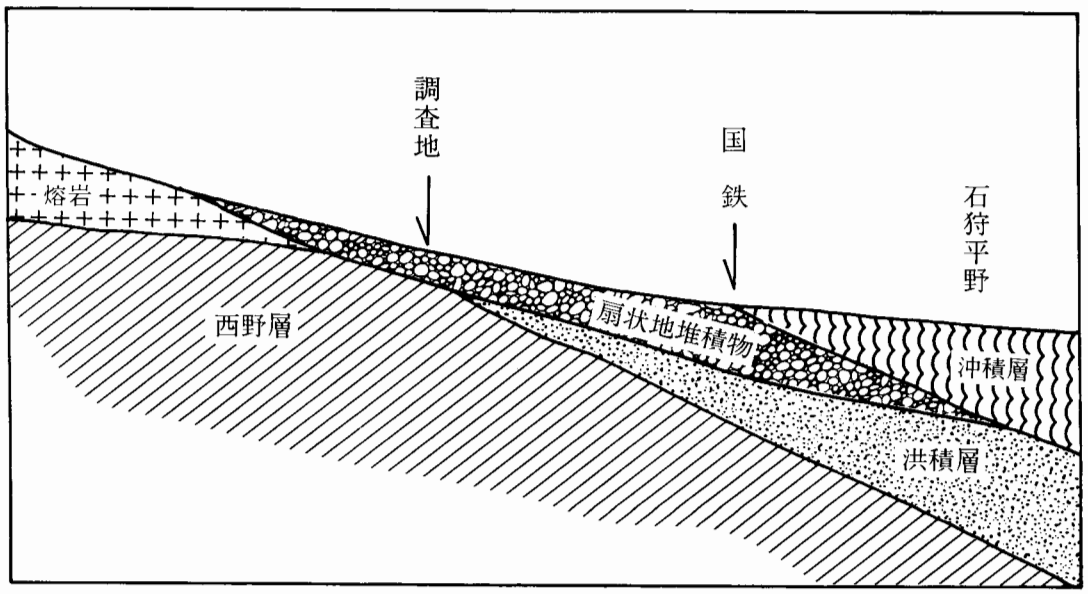
表土は多くの玉石が含まれる礫層のため，ほとんどの部分は耕作されておらず，りんご，梨の果樹が植林されており，それらの樹木を根ごと引き抜いてある為，部分的にこれらの攪乱がみられる。

層位の概要は，下記の通りである。

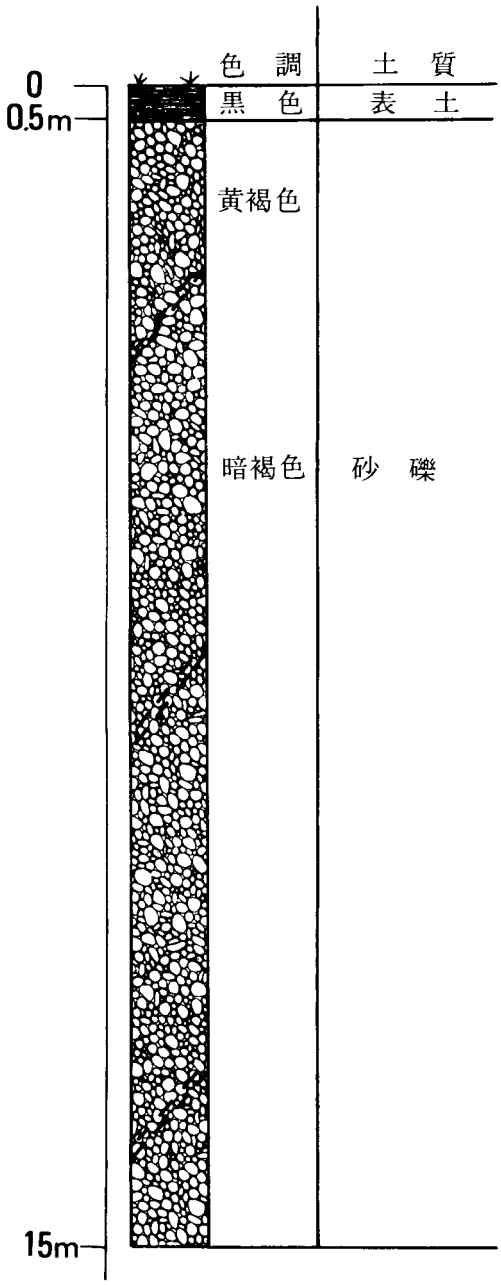
第Ⅰ層；黒褐色土，地表の植物の根を多量に含む。

第Ⅱ層；黒色土，第Ⅰ層より軟弱であり，かわくとクラックを生ずる。

第Ⅲ層；黒褐色土，第Ⅰ層，第Ⅱ層より堅くしまっている。



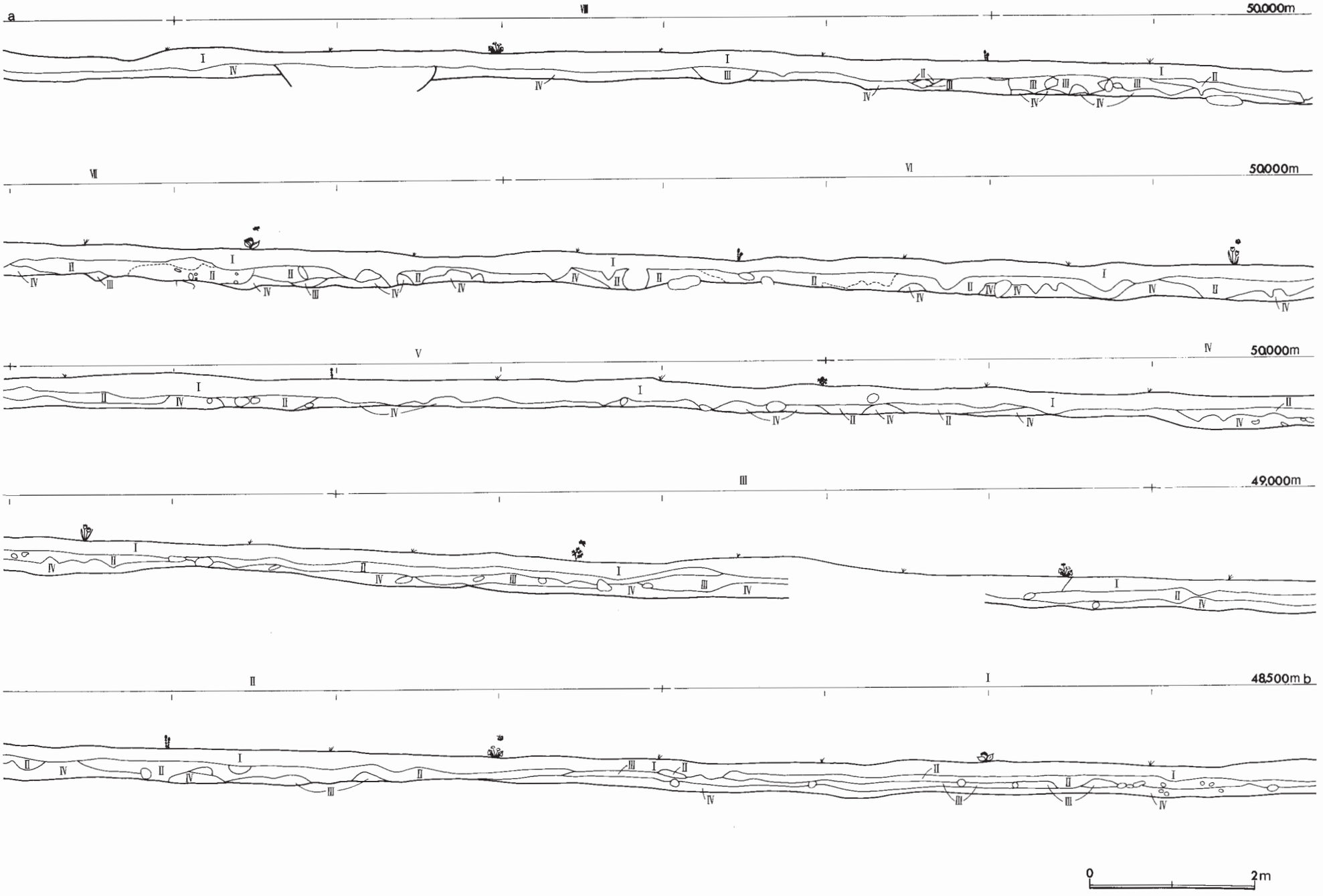
第４図　遺跡地質構造模式図



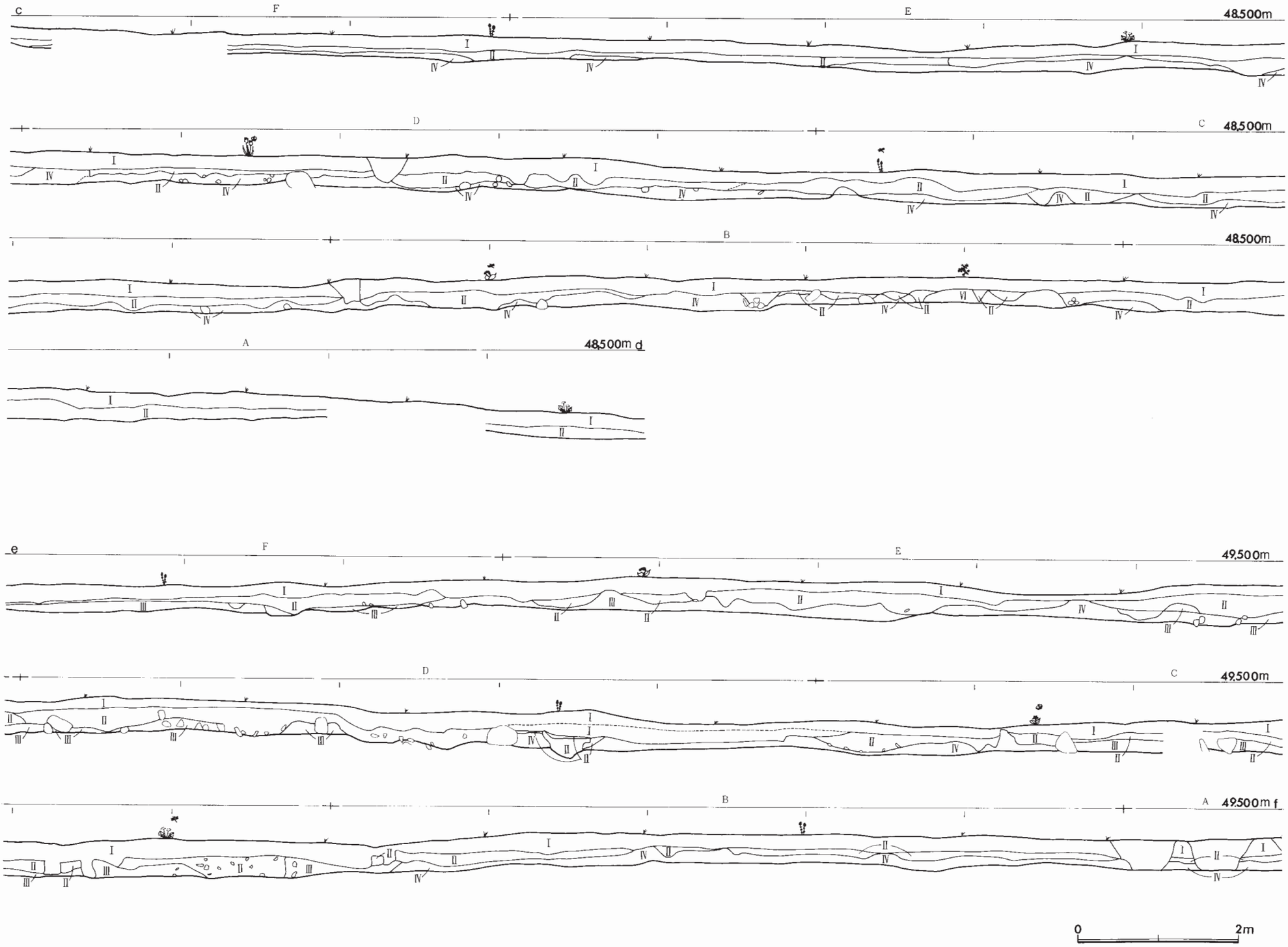
第5図　遺跡地質柱状図

第Ⅳ層；黄褐色土であり，基盤の発寒川扇状地堆積物である。

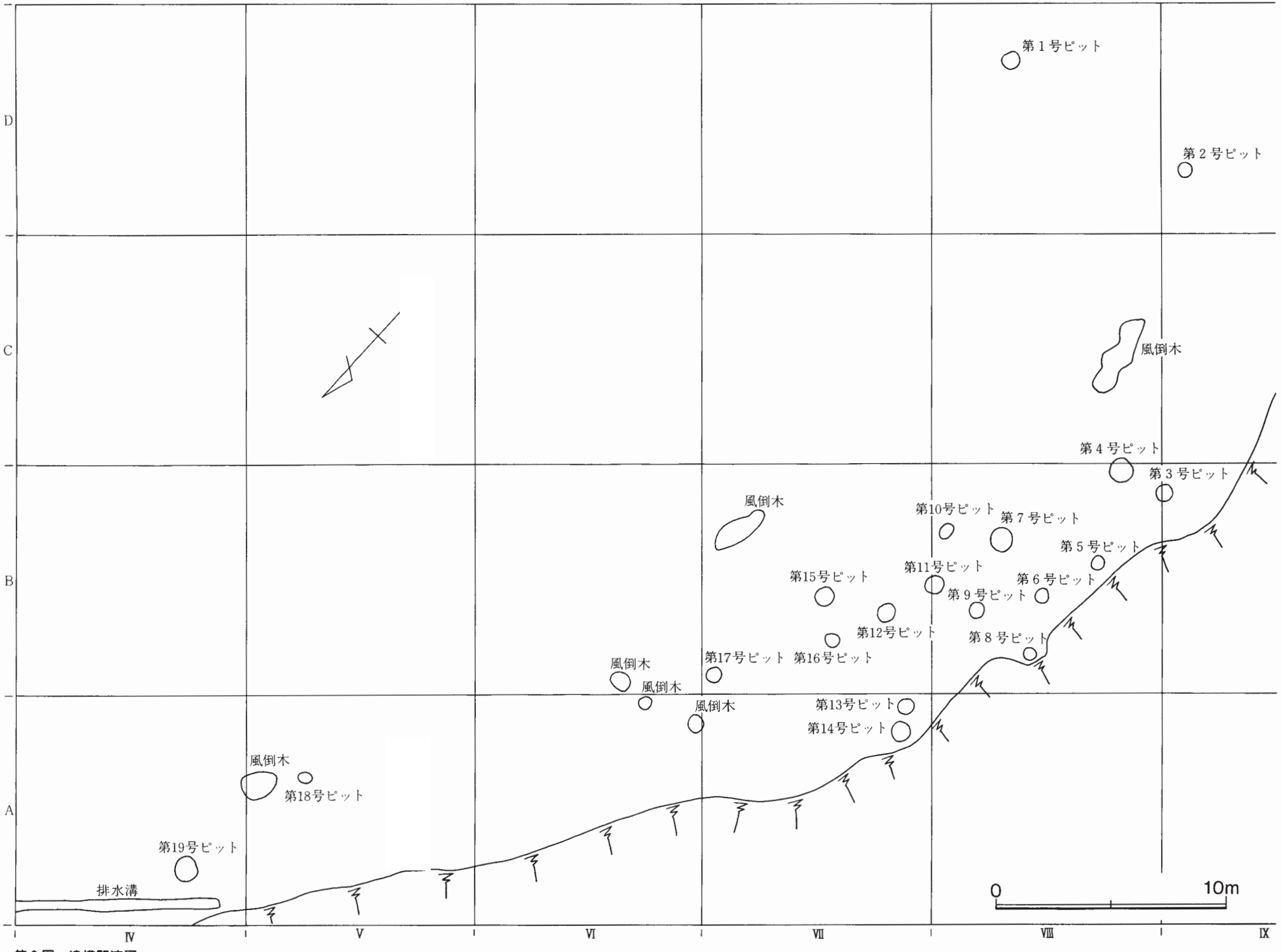
（羽賀　憲二）



第6図　a－bセクション図



第7図　c－d，e－f セクション図


第１号ピット
第２号ピット
風倒木
第４号ピット
第３号ピット
風倒木
第10号ピット
第７号ピット
第５号ピット
第11号ピット
第15号ピット
第６号ピット
第９号ピット
第12号ピット
第８号ピット
第17号ピット
第16号ピット
風倒木
風倒木
風倒木
第13号ピット
第14号ピット
風倒木
第18号ピット
第19号ピット
排水溝
0
10m
D
C
B
A
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ

第８図　遺構関連図

第4章　遺構及び遺構出土の遺物

本遺跡よりは，直径80 cm 内外深さ 20 cm内外の円形のプランを呈する土壙墓と考えられるピットが 19 個検出されている。

19 個のピット中 13 個については，その内部に，人頭大からこぶし大の玉石が数個～十数個みられ，石組を構成するものがある。

表土及び遺構の検出された扇状地堆積物上は，礫層といってさしつかえないほど大小の玉石が含まれており，土壙墓の埋土とともにこれらの玉石が流れ込んだとも発掘時においては考えたが，ピットを埋没させた層序及び玉石の状態より，人為的に置かれたものであろうと結論された。

さらにピット中の玉石は，特別なものを用いるのではなく，遺跡の表土中及び扇状地堆積物中に含まれる円礫をそのまま使用している。

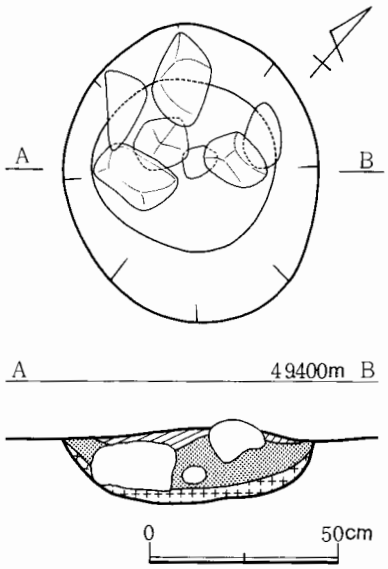
以下，各ピットについて説明していく。

第1号ピット（第9図）（図版5）

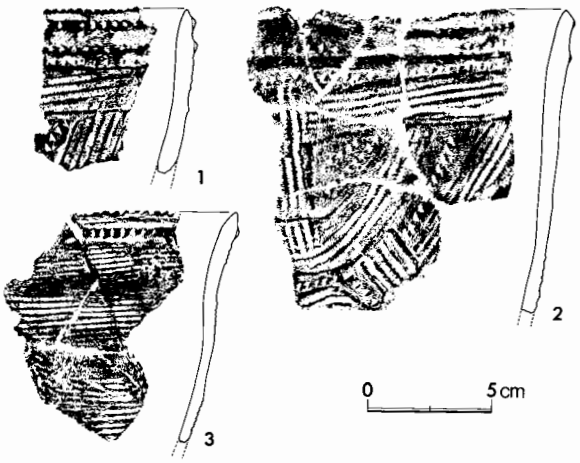
壙口 79×67 cmのやや楕円形を呈し，深さは，遺構確認面より 20 cm 内外ある。

長軸方向は，南東－北西方向である。

壁，壙底面は，かたくしまっており，しっかりしている。



第9図　第1号ピット



第10図　第1号ピット出土土器拓影

壁はやや傾斜し，底面近くにて丸味をおび壙底面へと至る。壙底面は平坦である。

本ピット中には，壙底面より3 cm程浮いた状態で人頭大からこぶし大の河原石が7個程みられ，ピット北西部に集中し，石組を構成している。

比較的大形の土器破片が壙底面に検出されている（第10図）。

第1号ピット出土土器（第10図）（図版18 A）

いずれも口縁部の破片であり，壙底面に接して検出されたものである。

小突起を有する破状口縁を呈し，口唇下に二段の隆起線がめぐり連続したきざみ目が施される。また口唇は，三角形状の断面をなし，連続したきざみ目を施す。

隆起線下には，微隆起線文，縄線文にて文様が構成され，三角形状の列点文が特徴的にみられるものである（1，2）。

1，2は，後北C_2式土器の諸特徴を有している。

平縁であり，口唇下に一段の隆起線がめぐり，その上に連続したきざみ目が施される。隆起線下には，1，2と同様の文様が，縄線文により構成される（3）。

3は，後北D式土器の特徴を有している。

胎土に砂粒を若干含み，焼成は良好である。色調は黒褐色（1，3），黄褐色（2）を呈し，器厚は0.8 cm内外である。

第2号ピット（第11図）（図版6）

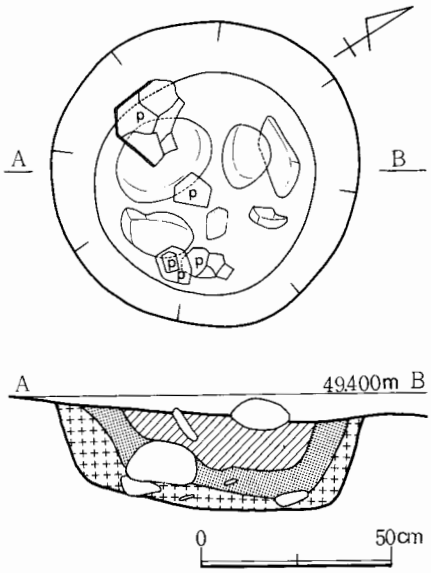
壙口，直径8.1 cmの円形を呈し，深さは，遺構確認面より26 cm内外のピットである。

壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。

壁は直立に近く，底面近くにてやや丸味を帯び，壙底面へと至る。壙底面は平坦である。

ピット内には，人頭大からこぶし大の石が一部壙底面に接し，さらに第II層中にまで5個程みられ，石組を構成している。

壙底面及び第III層中には，ほぼ一個体分の注口土器（第12図）が検出され，他に若干の土器破片が検出されている（第13図）。



第11図　第2号ピット

第２号ピット出土土器（第 12，13 図）（図版 17，18 A）

完形土器は，壙底面に押しつぶされた状態で検出され，全体の４分の３程の量の破片より接合復元された。全体は，やや磨滅している。

口径 25 cm，底径 8.5 cm，高さ 31.5 cm の深鉢形を呈する注口土器である。

口縁に４個の小突起が存在し波状口縁となり，内１個の突起部が注口となる。

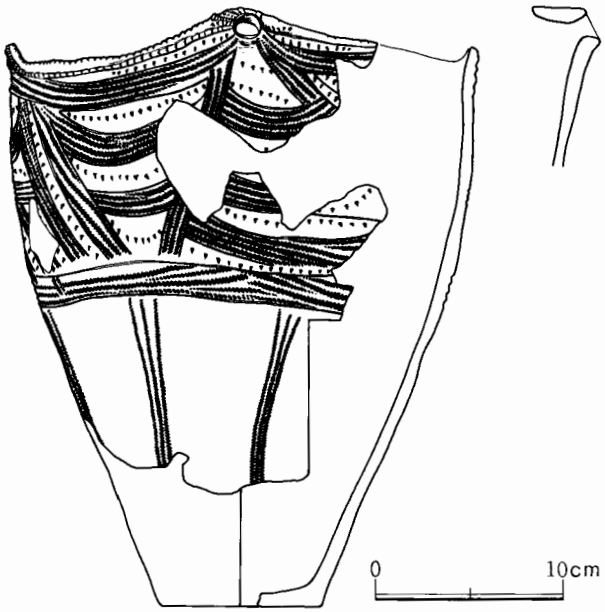
口唇断面は三角形を呈し，口唇上には連続したきざみ目を付ける。口唇直下には隆起線文が一段めぐり連続したきざみ目が施される。

隆起線下には，微隆起線文，縄線文による文様が構成され，三角形状の列点文が特徴的に加わっている。

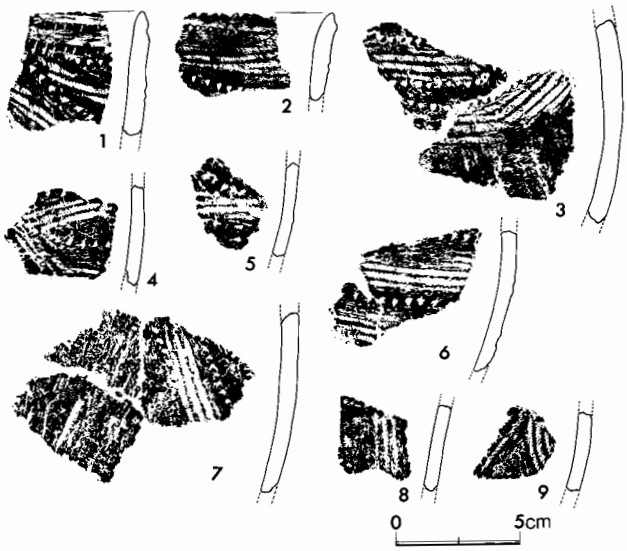
胴部下半は，縦位に数条の縄線文がみられる。後北 C_2 式土器の諸特徴を有している。

胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し，器厚は 0.8 cm 内外である。

第 13 図の土器は，壙底面とその直上にて得られたものである。



第12図　第２号ピット出土土器実測図



第13図　第２号ピット出土土器拓影

１，２は口縁部で，平縁であり断面が三角形状を呈する。口唇下に１，２段の隆起線があり，隆起線上には連続したきざみ目を施す。隆起線下は微隆起線，縄線文によって文様が構成され，三角形状の列点文が特徴的に加わる。

３～９は，いずれも胴部であり，微隆起線文，縄線文により文様が構成されており，三角形状の列点文が特徴的にみられる。

いずれも，後北 C_2 式土器の諸特徴を有している。

胎土には，砂粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し，器厚は 0.8 cm 内外である。

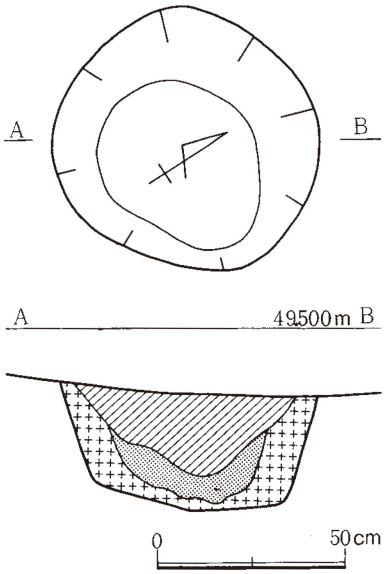
第3号ピット（第14図）（図版7）

壙口，直径70 cmの円形のプランを呈し，深さは，遺構確認面より31 cm内外である。

壁，壙底面は，かたくしまっており，しっかりしている。

壁はやや傾斜し，壙底面近くにて丸味を帯び壙底面へと至っている。壙底面は，やや中央部にて低くなり，すり鉢状となる。

遺物は覆土中，壙底面には一切みられない，また石組もない。



第14図　第3号ピット

第4号ピット（第15図）（図版8）

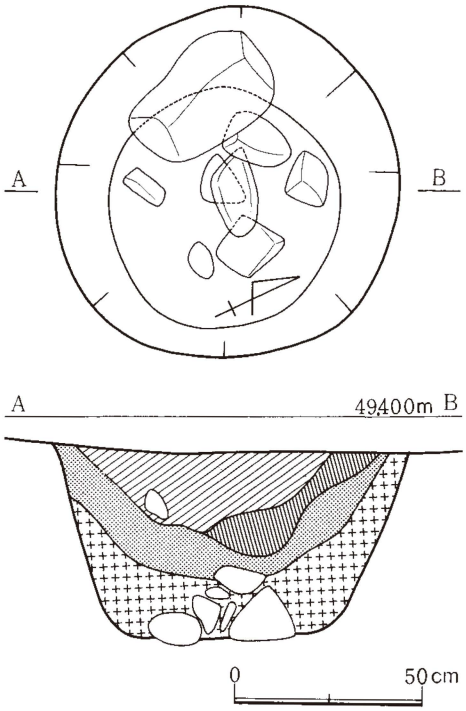
壙口，直径90 cm内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より50 cmある。

壁，壙底面ともかたくしまっており，非常にしっかりしている。

壁面は直立に近く，底面近くにて丸味を帯び壙底面へと至っている，壙底面は平坦である。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みられなかった。

壙口には，ひとかかえもある大きな石がおかれており，さらに壙底面中央部には，6～7個の人頭大からこぶし大の石がつみかさねられ石組を構成している。



第15図　第4号ピット

第5号ピット（第16図）（図版9 A）

壙口，直径60 cm内外の，やや隅丸方形を呈する。深さは遺構確認面より45 cmである。

壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。壁は直立に近く，底面近くにてやや丸味を帯び壙底面へと至っている。壙底面は平坦となる。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切検出されていない。

壙口には，人頭大からこぶし大の石が9個程積みかさなって石組を構成している。壙底面には一切みられない。

第6号ピット（第17図）

壙口，直径約60cm内外の円形を呈するピットで，深さは，遺構確認面より20cmある。

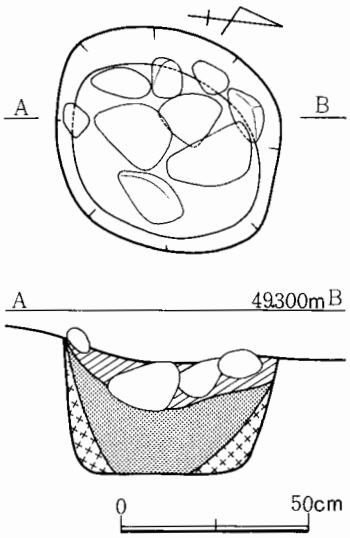
壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。

壁はやや直立に近く，底面近くにて丸味を帯び壙底面へと至っている。

壙底面はゆるやかな丸底となり，すり鉢状となる。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みられない。

また，石組もない。



第16図　第5号ピット

第7号ピット（第18図）（図版9B）

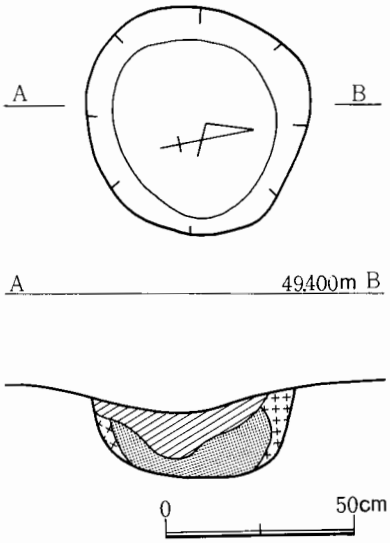
比較的大形で，壙口91×81cmのやや楕円形を呈するピットである。深さは遺構確認面より26cmである。

長軸方向は，南東－北西方向である。

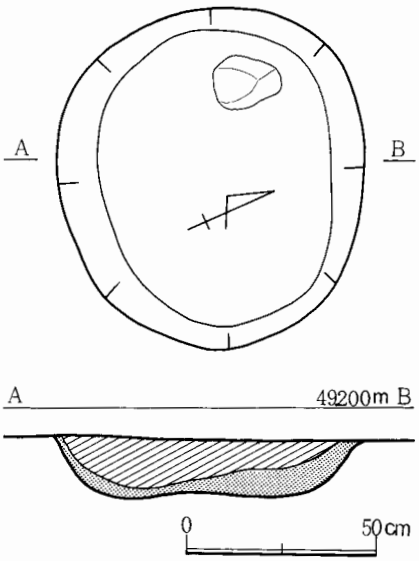
壁，壙底面はかたくしまり，しっかりしている。

壁はやや傾斜し，壙底面と接する部分にて丸味を帯び壙底面へ至る。壙底面の中央部は若干高く，壁周囲がやや低くなっている。

遺物は，覆土中，壙底面に一切みられないが，壙底面西壁近くに人頭大の石が一個置かれてあった。



第17図　第6号ピット



第18図　第7号ピット

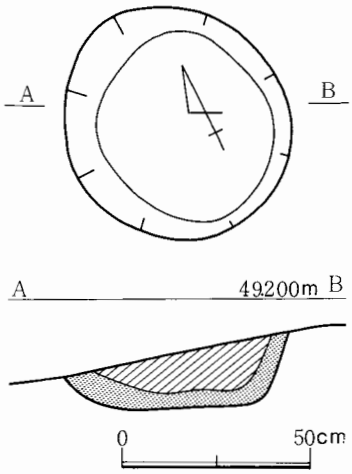
第8号ピット（第19図）（図版9C）

壙口，直径60cm内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より，最大で70cmを数える。

壁，壙底面ともかたくしまり，しっかりしている。

遺構確認面は，南東－北西方向にやや傾斜しているため，壁の状況は南東部においては直立に近く，北西壁はゆるやかに傾斜し壙底面へと至っている，壙底面は平坦である。

遺物等は，覆土中及び壙底面ともに一切みられない。また，石組もない。



第19図　第8号ピット

第9号ピット（第20図）（図版10A）

壙口，直径75cm内外の円形を呈する。深さは，遺構確認面より17cmである。

壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。

壁はやや傾斜し，底面近くにて丸味を帯び壙底面へと接している。

壙底面は平坦である。

遺物は，覆土中及び壙底面ともに一切みられない。また，石組もみられない。

第10号ピット（第21図）（図版10B）

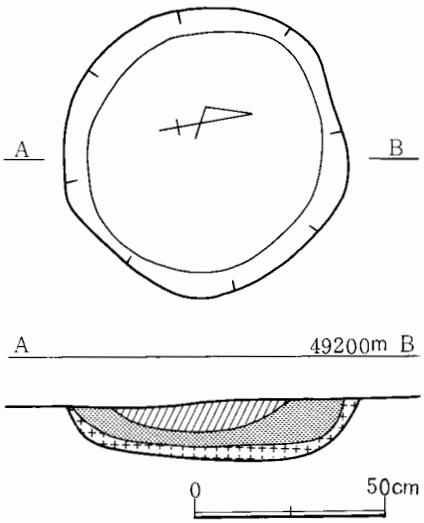
壙口，直径70cm前後の円形を呈し，深さは遺構確認面より25cmある。

壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。

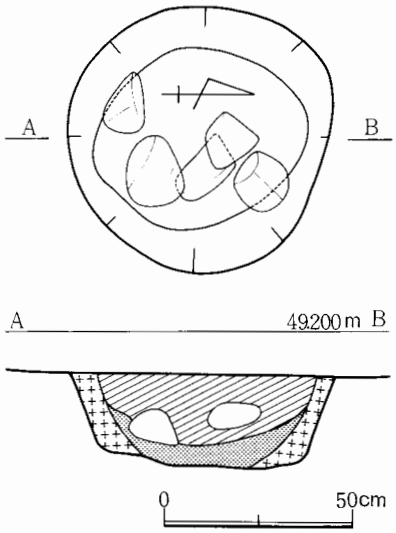
壁はやや傾斜し，壙底面近くにて丸味を帯び壙底面へと至っている。壙底面はほぼ平坦である。

遺物は，覆土中，壙底面にも一切みられない。

壙口部には，人頭大の石が5個あり石組を構成しているが，壙底面にはない。



第20図　第9号ピット



第21図　第10号ピット

第 11 号ピット（第 22 図）

壙口，直径 70 cm 内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より 20 cm内外ある。

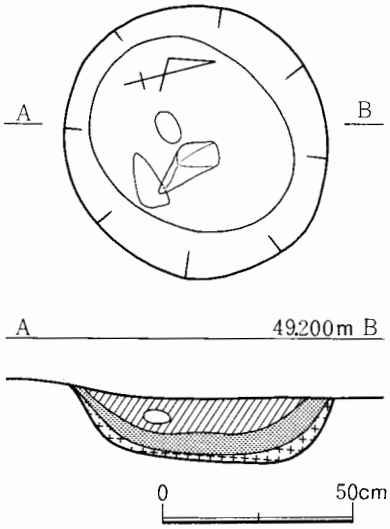
壁，壙底面はかたくしまっており，しっかりしている。

壁はやや傾斜し，底面に近くなるにつれ丸味を帯び壙底面に接している。

壙底面は平坦となる。

遺物は，覆土中，壙底面にも一切認められていない。

ピット壙口部の南東部には，3 個の人頭大の石がみられ石組を構成している。



第22図　第11号ピット

第 12 号ピット（第 23 図）

壙口，直径 75 cm 内外のほぼ円形を呈し，深さは，遺構確認面より 20 cmある。

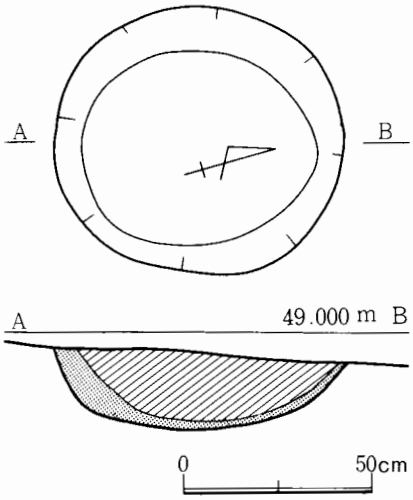
壁，壙底面ともにかたく，しっかりしている。

壁はやや傾斜しており，底面近くにて丸味を帯び，壙底面へと接している。壙底面はやや丸味を帯び中央部が若干低くなるようである。

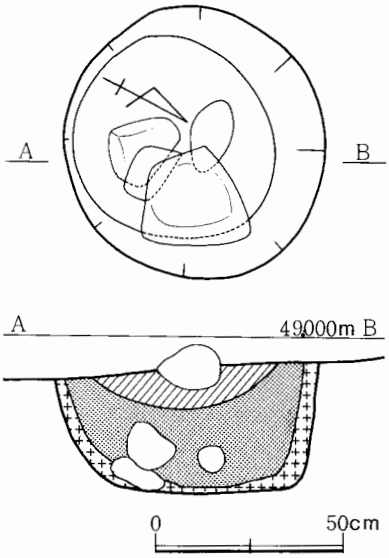
遺物は，覆土中，壙底面とも一切みられず，また，石組もない。

第 13 号ピット（第 24 図）（図版 11）

壙口，直径 70 cm 内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より 34 cm ある。



第23図　第12号ピット



第24図　第13号ピット

壁，壙底面ともに，かたくしまっている。

壁は，直立に近く，底面と接する部分にて丸味を帯び，壙底面へと至っている。

壙底面は平坦である。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みとめられない。

遺構確認面に 1 個の人頭大の石がみら

れ，壙底面に接してと，第II層中に3個の石がみとめられ，石組を構成している。

第14号ピット（第25図）（図版12）

壙口，直径80 cm内外のほぼ円形を呈し，深さは遺構確認面より26 cmある。

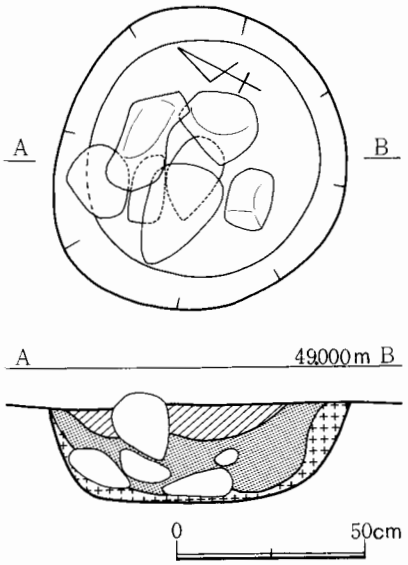
壁は，壙底面ともに，かたくしまっている。

壁は，比較的直立に近く，壙底面と接する部分にて丸味を帯び，壙底面へと至る。

壙底面は，平坦である。

壙底面より2～3 cm程浮いた状態で人頭大からこぶし大までの石が7個みられ，石組を構成している。

石組は，ピットの北側に偏在している。



第25図　第14号ピット

第15号ピット（第26図）（図版13）

壙口，直径78 cmの円形を呈し，深さは遺構確認面より30 cmある。

壁は，壙底面ともにかたくしまり，しっかりしている。

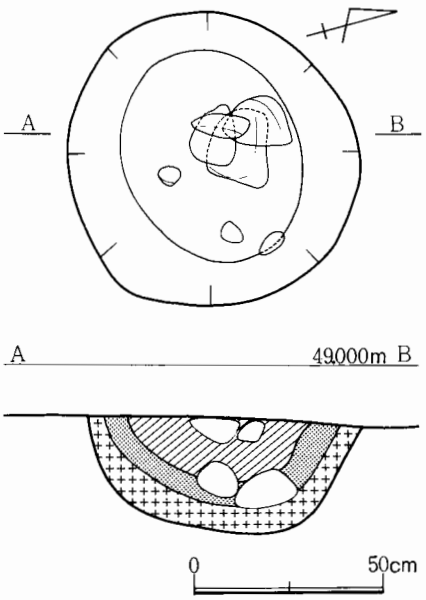
壁は，若干傾斜しており，壙底面が近づくにつれ丸味を帯び，壙底面へと至る。

壙底面は丸味を帯び，すり鉢状となる。

遺物は，覆土中，壙底面に一切みとめられない。

壙底面より9 cm程浮いた状態で人頭大の石が4個みられ，石組を構成している。

石組は，ピットの北側部分に集中している。



第26図　第15号ピット

第16号ピット（第27図）（図版14）

壙口，75 cm×62 cmの楕円形を呈し，深さは遺構確認面より17 cmある。

ピットの長軸方向は，東－西である。

壁，壙底面ともにかたくしまり，しっかりしている。

壁はやや傾斜しており，底面近くになると丸味を帯び，壙底面へと至る。

壙底面は平坦に近いが，やや低くなる部分もある。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みとめられない。

ピット中央部に4個の人頭大からこぶし大の石による石組がある。これらの石組は，壙底面より

2～3 cm 浮いている。

第 17 号ピット（第 28 図）（図版 15 A）

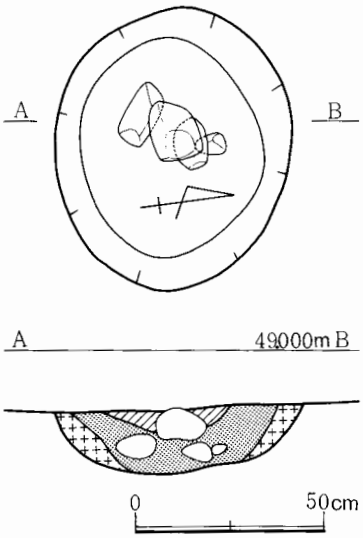
壙口，直径 65 cm 内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より 11 cm ある。

壁，壙底面ともにかたくしまり，しっかりしている。

壁はゆるやかに傾斜し，底面近くにて丸味を帯び，壙底面へと至っている。

壙底面は，平坦である。

壙底面より 2～3 cm 浮いた状態で人頭大からこぶし大の石が 3 個，やや離れて検出されている。



第27図　第16号ピット

第 18 号ピット（第 29 図）（図版 15 B）

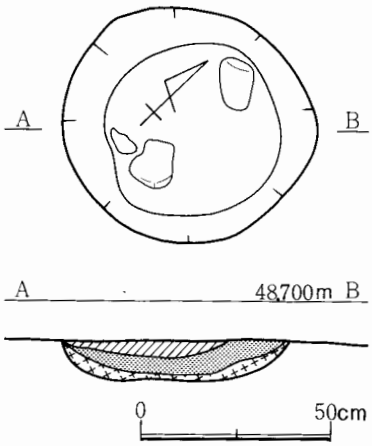
壙口，直径 65 cm 内外の円形を呈し，深さは遺構確認面より 14 cmある。

壁，壙底面ともにかたくしまっており，しっかりしている。

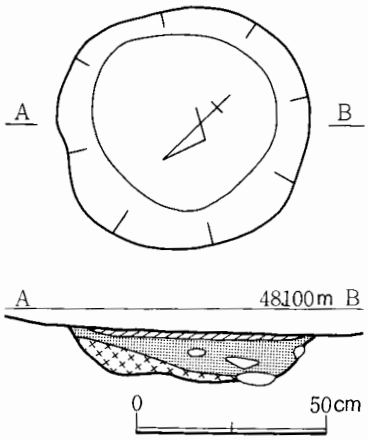
壁は傾斜しており，底面が近くなるにつれ丸味を帯び，壙底面へと至っている。

壙底面は，平坦ではなく，でこぼこしている。

遺物は，覆土中，壙底面ともに一切みとめられていない。また，石組もない。



第28図　第17号ピット



第29図　第18号ピット

第19号ピット（第30図）（図版16）

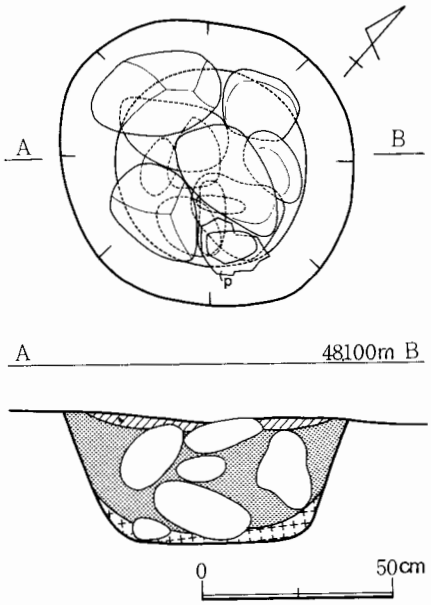
壙口，直径77cmの円形を呈し，深さは，遺構確認面より35cmある。

壁，壙底面ともにかたくしまり，しっかりしている。

壁は直立に近く，壙底面と接する部分にて丸味を帯び，壙底面へと至る。

壙底面は，平坦である。

本ピットには，壙底面より1～2cm浮いた状態で12個の人頭大の石が壙口部まで詰まっており，さらに石と石との間に，一個体分の土器（第31図）が押しつぶされた状態で出土している。



第30図　第19号ピット

第19号ピット出土土器（第31図）（図版17）

壙口より約10cm下の配石の間に，石の重みと土圧により押しつぶされた状態で出土したものである。全体的に磨滅しており，非常にもろかった。

口縁の大部分を欠損しているため，本来の器形は不明である。

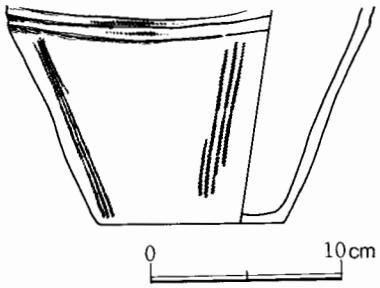
現存高12cm，底径10cmの深鉢形を呈するであろう土器である。

二段の微隆起線がめぐり，その間に縄線文がみられる。以下は，縦位の縄線文が数条みられる。

後北C_2式土器であろう。

胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し，器厚は0.8cm内外である。

（羽賀　憲二）



第31図　第19号ピット出土土器実測図

第5章　発掘区出土の遺物

第１節　土器

本遺跡の発掘調査によって出土した土器は，縄文時代中期，晩期，続縄文時代の土器である。次に、それらの土器についてⅢ群に分けて、その概要を記す。

第Ⅰ群土器（（第34図１～６）

第35図１は，横位の貼付帯を有し，縄文を施文した土器である。２は，横位の貼付帯に対し，これに垂下する貼付帯を配したもので，口唇部には，沈線と縄文を施文する。３は，粗雑な沈線と縄文によるもの，４は，沈線と刺突文を施文するもの，５，６は，縄文と沈線を施文する土器である。

第Ⅱ群土器（第32図，第33図，第34図７～23）

第22図１は，口径約35cm，現存高約25cmである。口縁部は，４個の大型突起を有し，その中間部に小さな突起を持つ。大型突起の裏側には，内側に貼り出す突起がつけられている。突起の表面は，三角形状に無文帯としている。その下部には，幅広の無文帯を配し，以下３本の縄文帯と沈線とがある。上段の沈線は，数ケ所の瘤により切断される。胴部以下は，縄文である。器形は，口径より胴部がやや膨む形となろう。

第32図２は，口径約24cm，現存高約40cmである。口縁部は４個の突起が見られ，突起部の表面のみに縄文帯がつけられ，その部位には，刺突文が施文される。その下部には，太めの沈線によって，はさまれる縄文帯が見られる。その下段には，貼瘤によって切断される沈線をめぐらす。胴部は縄文である。口縁部がやや直立を呈する深鉢形土器である。

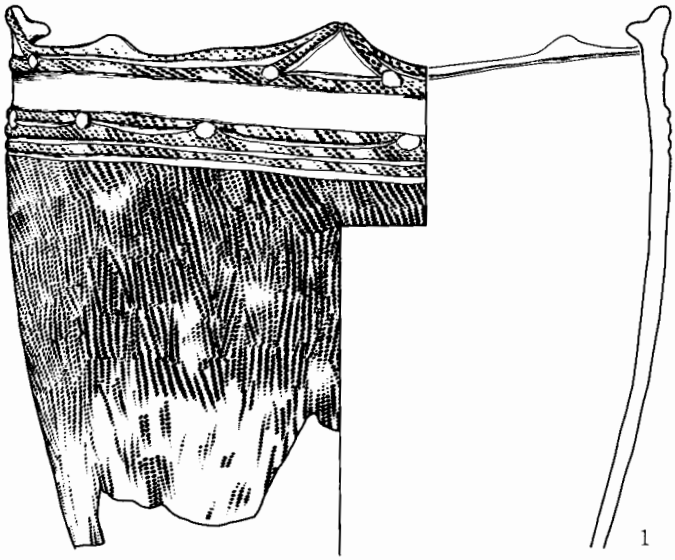
第33図３は，口縁部に２個１対の突起が４ケ所に見られる。突起部からは，雁股状の太い沈線を縦に配し，これに横走する２本の沈線をめぐらす。そして，この沈線に沿って刺突文を配する。地文は縄文である。器形は，第33図２に近い深鉢形であろう。

第33図４は，ほぼ平縁を示し，口縁部がやや内湾する深鉢形である。口縁部内側に，縦位と横位に撚紐原体の押捺が見られる。表面の縄文は，磨滅がはなはだしく，一部にしか縄文が見られない。

第33図５は，４と同様な器形を呈する土器である。口唇部には縄文が施文される。表面の縄文は，磨滅が著るしい。

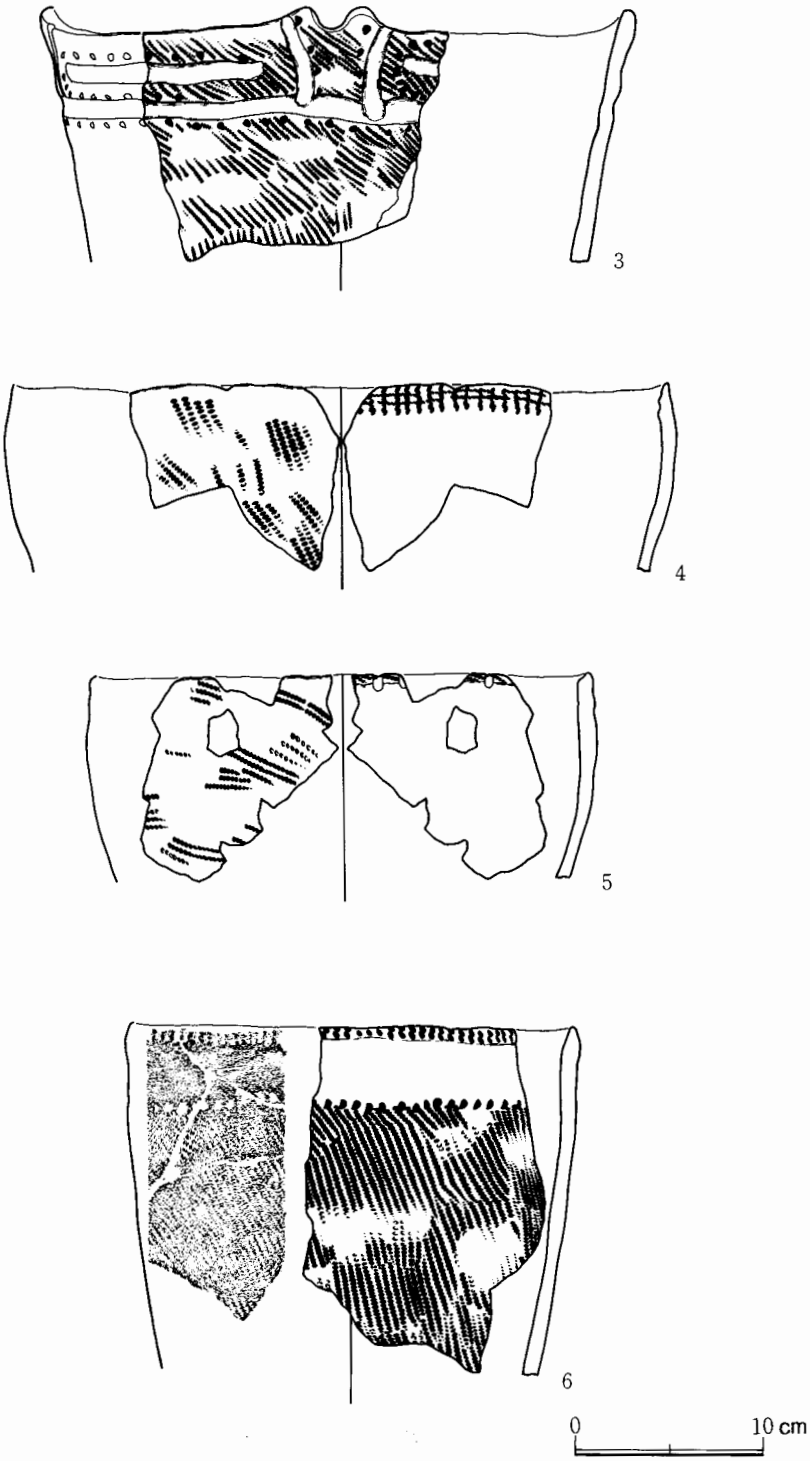
第33図６，口縁に撚紐の押捺を施し，その下部に無文帯を配する。無文帯の下端には，半月状の刺突をめぐらし，以下縄文を施文する。

第34図７～11は，口縁部に巾広の沈線及び無文帯を数条めぐらす土器である。７，８は，同一土



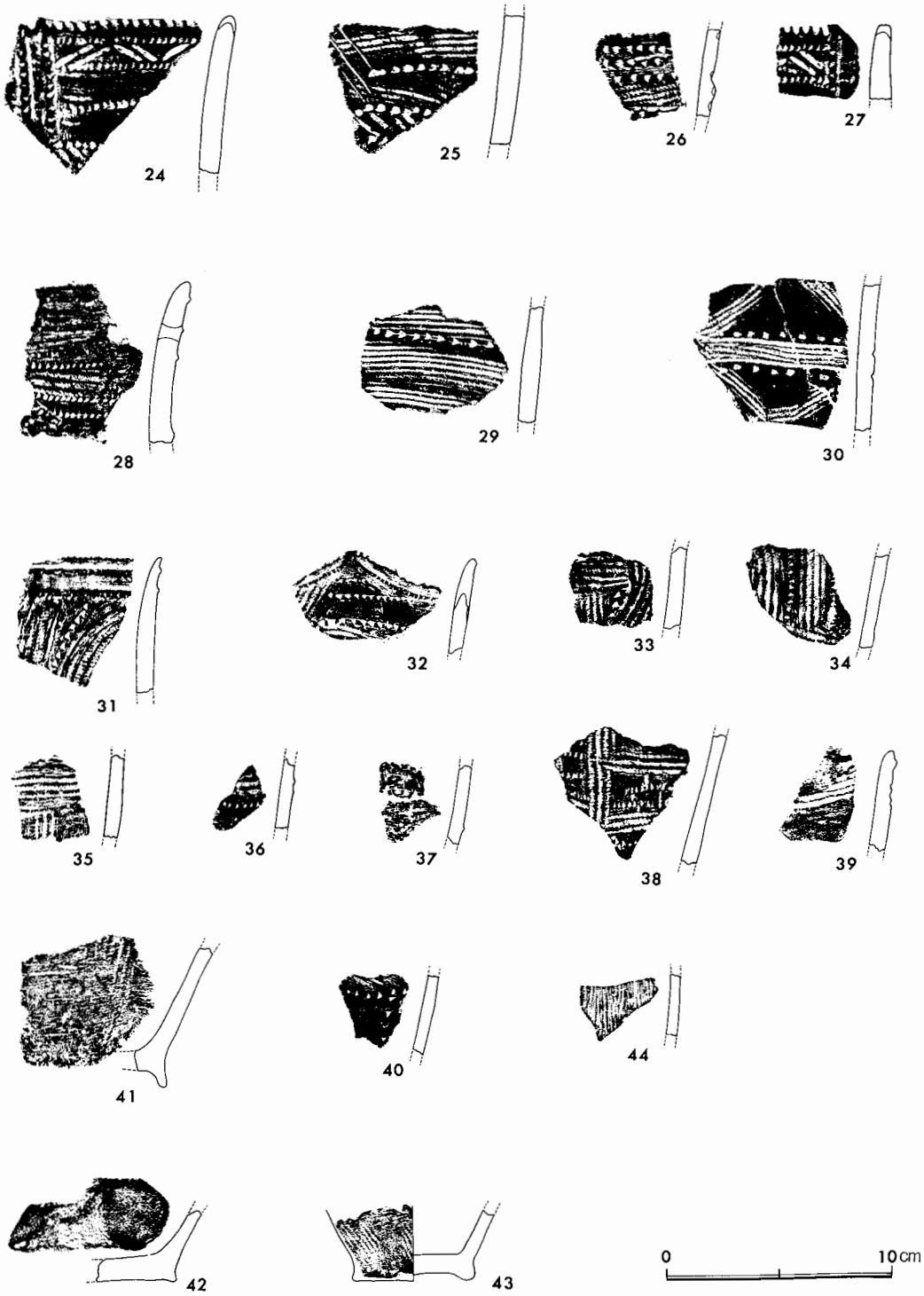
0　10 cm

第32図　発掘区出土土器実測図（1）



第33図　発掘区出土土器実測図(2)

第34図　発掘区出土土器拓影



第35図　発掘区出土土器拓影

器の破片であろう。12，13は，第32図1の破片である。14は，突起を有する口縁部で，その突起に沿って横位の沈線を配している。その下段は，無文帯と沈線をめぐらす。15は，やはり口縁部に小突起を有し，最上段の沈線は一部鋸歯状を示す。その下部は，無文帯と沈線を配する。16は，無文帯の上下に沈線を配するものである。17，18は沈線を周繞する土器で，17の口唇に刻みを施文し，18は，沈線の下部に円形の刺突を施文する。19は，第33図3の破片であろう。20は，無文帯を中段に配し，その上部には，縦位の太い沈線と，横位の細い沈線および刺突を配し，下段は，刺突文と縄文を施文する。21は，表面が縄文のみの土器で，口唇内側に3本の横位の縄線文が見られる。22，23は，浅鉢形土器の破片で縄文のみを施文する。

第Ⅲ群土器（第35図）

第Ⅲ群土器としたものは，続縄文時代以降のかなり巾広い時期の土器を一括した。

24，27は，口唇部に刻みを有し，これより垂下する2本1組の刻みをつける貼付帯，横位の鋸歯状沈線，連続刺突を施文する。25，26は，横位の縄文と刺突文，沈線が見られる。28は，刻みを有する隆起線と連続刺突及び縄文を施文する。29は，横位の縄文と刺突，30は幾何学的な文様を主体とする。31～36は，微隆起線文，連続刺突文，縄文を有する土器。37～40は，微隆起線文の見られないものである。41～43は，土器の底部であり，43は，縄文を施文する。41，43は，明瞭な揚底となっている。44は，擦文式土器であろうか。本資料1片のみが出土した。

（加藤　邦雄）

第2節　石器

発掘区からは，16点の石器と若干の黒耀石剥片が出土している。

しかし層位的なうら何けを有するものは，皆無であり各石器は伴に出土した第Ⅰ～第Ⅳ群土器のどの土器群に伴出するかは不明であった。

石鏃（1～6）

1は，入念に両面加工が施こされており，顕著な「かえし」部分があり，有茎である。

2，4は，入念に両面加工が施されへ，左右非対称形ながら「かえし」があり，有茎である。尖頭部を欠損している。

3は，入念に両面加工が施こされ，有茎である。小形であり，「かえし」は顕著ではない。

5は，ラフな両面加工が施こされ，尖頭部を欠損している。

6は，幅広の剥片を素材に，両面加工が施こされ，二等辺三角形状となる。無茎であり，基部は平らである。

全例黒耀石製である。

銛先（7，8）

いずれも，破損しており断片である。

7は，柄部の破片で，入念な両面加工が施こされている。

8は，尖頭部と基部を破損した部分である。

削器（ナイフ類）（9～14）

9，10は，黒耀石剥片のエッヂの一部に簡単な剥離加工を施こしたものである。

11，13は，比較的厚手の大形の剥片の側縁部剥離加工を施こしたもので，サイド・スクレパーと称されるものである。

12は，大形の縦長剥片の両側縁に剥離加工の施こされたもので，つまみを作り出している，縦形の石匙と称されるものである。

本資料は，つまみ部分を欠損している。

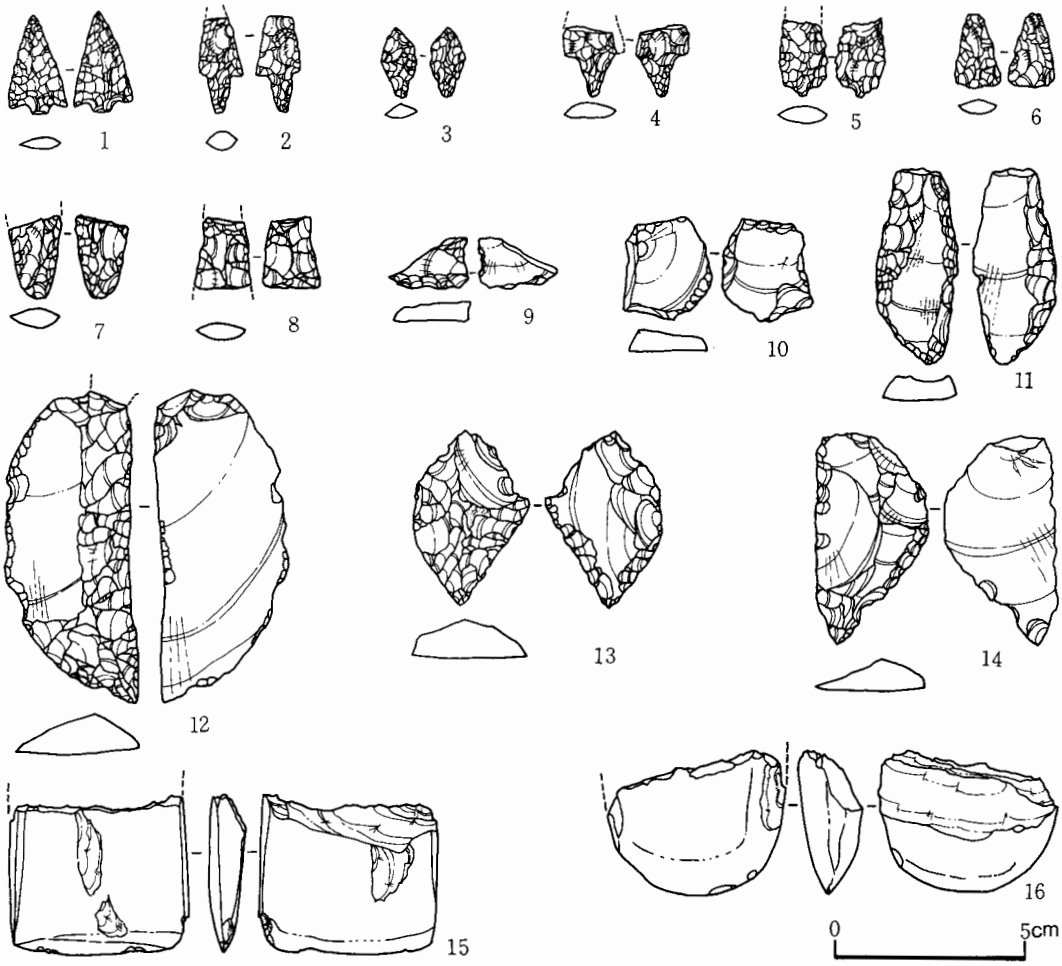
石斧（15，16）

15は，頭部を欠損しており，直線的な刃を有し，片刃である。薄手で入念な研磨が両面になされ，左右両側縁には，石のこによる擦り切り痕が残っている。

16は，頭部を欠損しており，丸味を帯びた刃部となり，片刃である。

比較的厚味を有し，入念な研磨が両面になされている。

（羽賀　憲二）



第36図　発掘区出土石器実測図

第6章　まとめ

第1節　土壙墓よりみた続縄文時代について

I

本遺跡では，前述して来たように19個の直径60～90 cm，深さ遺構確認面より20～50 cmのほぼ円形のプランを呈する土壙墓と考えられるピット群が検出されている。

これらのピット群は，中川という遺跡の西側を流れる小河川の河岸段丘の側縁に十数m幅で分布している。これらのピット群の一番外側に位置する3個のピット（第1号，第2号，第19号ピット）には，副葬品と考えられる土器が壙底面及び覆土中に検出されており，さらに玉石数個～十数個の組石が同時に存在していた。

副葬品と考えられる，ピット内より得られた土器は，いずれも後北C_2，D式土器と称せられるものである。

他のピット群については，上記の3個のピットとプラン，概要等ほとんど同様の状態であり，副葬品としての土器の存在のみ欠いている。

時期的判定の資料となる土器が検出されず，時期の判断はできない。しかしピットの概要，プラン，石組の存在等の諸事実は，土器の検出されたピットと同様の状態であり，これとほぼ同一時期に構築されたものと考えられ，土壙墓としての性格を有するものといえよう。

さて，本遺跡に於いて検出された土壙墓群の諸特徴を列記してみよう。

1．土壙墓のプランは，円形を呈し，その規模は直径60～90 cm，遺構確認面よりの深さは20～50 cmであった。

2．土壙墓群の分布の状況は，やや両面に傾斜する河岸段丘の側縁に集中し，しかも一番外側部分に位置する3個の土壙墓内にのみ，土器が副葬されていた。

3．副葬品のある土壙墓は，19個の土壙墓中，3個しか存在せず，きわめて薄葬化の傾向がある。

4．玉石数個～十数個による石組が，19個の土壙墓中，13個のものに認められる。さらに土壙墓内にみられる石組の素材である玉石は，別地点より持ち込まれたものでなく，本遺跡をのせる台地，表土及び基盤の発寒川扇状地堆積物である礫層に含まれる手ごろな玉石をそのまま使用している。

5．石器類，玉等の副葬例は，皆無であり，遺物の全く検出されない土壙墓が多い。

以上が，本遺跡にて検出された土壙墓群の諸特徴である。

各土壙墓のプラン，規模を考えるならば，縄文時代より伝統的にうけつがれて来た屈葬という葬法ならば，各ピットは土壙墓としての役割を充分にはたすものである。

かつて，重松氏は北海道に於ける土壙墓を集成する中で，墓の認定のあり方に若干の批判を加え問題点を整理している（重松1971，1972）。

これにも指摘されているが，縄文時代より続縄文時代にみられるごく一般的な土壙墓の全体的な様相中にも副葬品が無い土壙墓が数多くあるようである。

しかし一般的には，遺物が検出されない土壙に関してはプラン，規模等土壙墓としての条件が完備しているにもかかわらず，土壙墓としての位置付けがあいまいになされる例が非常に多い様である。はなはだしい場合には報告より一切削除されているものもみられる。

本遺跡に於いては，プラン，規模等より墓としての機能を充分に有するという観点より土壙墓としての性格を第一に考えた。

II

本遺跡に於いて検出された19個のピット群は，土壙墓としての性格が考えられている。

しかし各土壙内には，副葬品と考えられる土器等の遺物は，3個の土壙内よりしか得られてはおらず，他の16個の土壙からは全く検出されていない点が特徴の1つとしてあげられている。

いわゆる後北期の土壙墓については，昭和初期における江別兵村付近の一連の発掘にて土器，石器，玉類等の副葬品が豊富に存在する事が報告されて以来，現在に至るまで副葬品が豊富に存在する時期であると一般的にはいわれて来ている。

また時期的に通観した場合，後北A，B，C_1式の段階までは，厚葬化といった傾向があり，C_2，D式に至っては薄葬化が顕著となるようである。

最近，いわゆる行政調査にて当該時期の土壙墓群を有する遺跡の大規模な発掘調査が行なわれ，その報告が続々となされている。

これらの新しい資料より考えて，副葬品の問題点を指摘し，副葬品の無いあるいは副葬品の非常に少い土壙墓について若干の考えを記して行こう。

最近の報告例では，札幌S 153遺跡（加藤 1976），石狩ワッカオイ遺跡（石橋他 1975，1976），余市天内山遺跡（峰山他 1970），十勝太若月遺跡（後藤 1976）等があり，また久しくその報告が待たれていた江別坊主山遺跡の概要も広表されるに至った（高橋 1973）。

札幌S 153遺跡では，1万2千m²に及ぶ地域に総数805個の遺構が得られ内特殊なものを除く769個が土壙墓と考えられている。

769個の土壙墓の内，副葬品（土器を中心として）によって時期的な判定がなされたものは，縄文時代中期1，晩期22，恵山5，後北A 1，同$C_2$18，同D 19，北大式7，土師器の副葬されたもの3の合計76個しか存在せず，総数からの比率では9.8%と非常に低い数置が示めされている。

さらに大形の土器破片があり，その時期が不確実ながらも明らかとされたものが271個存在し，総数の35.2%を占めている。これと同数のピットにはごく微量の土器破片が含まれ，さらに同数のピットには遺物が皆無であるといった状況にある。

そして，後北C_2，D式の時期に構築されたと考えられるピットは，102個記載されているが，明らかな副葬品といった形で完形土器，さらにこれらに順ずる遺物の検出された土壙墓は，37個しかみられず，他の70%弱の土壙墓中には副葬品と明確に断定される遺物がほとんど検出されていない

事実が示めされている。

石狩ワッカオイ遺跡では，後北C_2，D期の土壙墓が主に検出されている。ここでは，土壙墓が主に検出されている。ここでは，土壙墓の80%弱のものに完形土器，玉類の豊富な副葬品が検出されている。

さらに詳細な報告は，まだであるが，江別坊主山遺跡では，総数83個の土壙墓についての概要が明らかにされている。

土器，石器等の副葬品が検出された土壙墓は60個を数え，全く遺物の検出されていないもの15個，さらに概要の不明なものは8個であったという。後北式土器を副葬したものについてのみ実数が明らかとされている。他は遺物（土器，石器等）が得られている様であるが，時期等については記されていない。

後北式土器が副葬され，時期の判明がなされているものは後北A 1，B 5，C_1 3，C_2 3，D 6，C_2，D 1と以外に少なく19個よりない。

十勝太若月遺跡では，総数で109個のピットが得られ，総ピット中，中に遺物が全く検出されていないピットが49個あり，約半数のピットには遺物が何ら検出されていないといった事実が明らかにされている。

後北期の土壙墓と断定されたものは，18個であり，他は他時期の物であった。後北期の土壙墓は，B式のもの1例を除いて，他は全てC_1式に属するものである。

以上各遺跡にての土壙墓の概要について述べて来たが，特に問題点として留意しなければならないのは，副葬品の無い墓の数が比較的多くみられるという事である。

後北期のA，B式といった段階の土壙墓の資料は非常に少なく，C_1以降，C_2，D期に至るとその数量は特に増加するという点である。

さらに，後北C_2，D期においてであるが，札幌S 153遺跡，石狩ワッカオイ遺跡の両遺跡間にみられる，副葬品の有する土壙墓の比率の差が極端にある事が示めされる。

ほぼ同一時期に営まれたであろう遺跡間に，大きな差違が存在する点をまず指摘せねばなるまい。

各遺跡間にみられる，副葬品の存在の差は，当然各遺跡をになった，各集団間の差として考えられよう。さらに土壙墓の概要（プラン，規模等）には大きな差位はみとめられない点より，副葬品の存在，有無にて葬送儀礼の差という点をとらえる事は無謀であろう。

続縄文文化という文化概念は，本州での稲作農耕を生産基盤とした文化に，対応して用いられるように，その生産諸活動の本質は，縄文時代より延々と続く狩猟，採集等といった自然に依存した生産活動が基盤となり，縄文時代と本質的に規制される所の多い，精神文化についても大きな変化は生じていないという事であり，葬送儀礼についても大きな変化は見い出せないと考える。

自然に依存した，生産形態をとる限りにおいては，当然自然の諸条件によって生産物の生産量は大きく変化すると推定がなされる。

特に札幌市域に限って考えるならば，縄文時代及び続縄文時代等の450ケ所におよぶ遺跡の存在

が確認されているが，一大集落を構成するような大規模な遺跡の存在はきわめて少なく，小規模なキャンプサイト的な遺跡が大部分である傾向があり，当該地域の自然条件は特にきびしいものであったろう事が考えられよう。

石狩ワッカオイ遺跡及び江別坊主山遺跡は，石狩川という大河川を背景とした自然条件があり，これより得られる生産量も当然，札幌市域とは大きな差位があったであろう。

土壙墓内に副葬される，土器，石器，玉類等といった物質的なものの，数量的差等々も各遺跡をになってきた，集団の生産活動の背後にある自然的条件にのっとった形で出現していると思われる。

III

続縄文文化という概念規定は，本州北端にまで達した。稲作農耕と金属器の使用に代表される弥生文化（＝農耕文化）に対して，金属器が移入されたのみで，縄文時代より延々と続けられた自然に依存する伝統的な狩猟，採集等を生産活動の基盤とする狩猟社会が継続した辺境地域の停滞した文化を指し用いられている。

自然に依存した，収奪のみの狩猟，採集等の生産活動を基本とする社会構造は，外部から鉄製品を主とする金属品の移入がもたらされる事によって社会構造等に大きな変革がもたらされたであろう事は，多くの先学にて指摘されている通りである。

しかし，こういった社会構造等の文化構成の内容をより明らかにするといった，研究姿勢の本質的なものを無視して，続縄文時代の土壙墓群より得られた豊富な石器群について，単にその器種，形状，組成の差，類例を論ずる報告等がみられる。

また縄文時代中期に於ける石器群と，続縄文時代のそれを，各種の計測値，統計表及びグラフまで用いてその形状，器種，組成の差を論ずるに至っては，いったい何の為の論か理解に苦しむ所である。

それには，遺跡のもつ性格はもとより，時代差という大きなハンディ等当然考慮されてしかるべき所を，全く無視し，文化の内容にすでに大きな差違が認められているものを，石器群のみ取り出し，その形状等の差違を一見科学的裏付けがあるかのような方法を用い，その論を進め，両者の差違のもつ本質的な部分を忘れ去っている。

この様な，物質にのみ固執する態度は，社会構造，生産活動といった文化の本質を研究する姿勢とは全く無縁のことであろう。

続縄文時代における石器群のあり方は，組成，形状とも鉄器がすでに移入され，利器類の主要な部分を占めつつあるといういわば過渡期的なものが当然想定される。こういった意味に於いても，縄文時代とは明確に区別され今日に至っている事を忘れてはならないのである。

現時点にて，続縄文時代の石器群の様相について述べるなら，鉄器の移入がスムーズに行われたという事実と，鉄器の移入により利器としての石器を事心とした生産活動に変化を生ずるという点であろう。これは，当然保守的な石器文化が崩壊して行く過渡期であったわけであり，生産形態より規定される社会構造、精神構造にも大きな変化が生じたという点も含まれる。

さて続縄文時代に於ける，石器類が鉄器類によってその姿が変化をとげて行く事実については，すでに木村英明氏によって述べられている（木村 1976)。

それに，私なりの資料を付け加え，社会構造、経済活動の変化がいかに生じたか考えて行こう。

続縄文時代の古い部分から新しい時期にかけての石器群の様相は，かなりの変化が認められる。これらの石器群の組成、形態の変化等の変遷は鉄器類の移入量とそれにともなう普及の度合と正比例していると考えられる。

続縄文文化の本質は，自然より収奪するのみで還元性の乏しい狩猟，採集といったきわめて初現的な生産活動が基本となり，本州地域での農耕の発生，つまり対自然より一方的に収奪するのではない一程度の計画性を有する一歩進んだ生産形態と明確に区別されなければならない。さらに農耕という生産形態には，必然的に存在する定住性の問題，共同体的作業の確立，さらには剰余生産物が生み出される事による交換形態等との変質といった，縄文時代とは，社会的体制そのものが変化していくといった点を留意しなければならない。

ここでは，縄文時代より延々と続いて来た狩猟，採集といった自然に依存し，一方的に収奪のみを生産活動とする社会構造の中に，生産力が飛躍的に増大化する役目をになった利器としての鉄器類が移入される事で，生産力の増大化，労働力の剰余といった現象が生じ，これらを背景として縄文時代より延々と継続して来た自然に依存している狩猟，採集といった基盤の社会構造にどのような変化が出現し変貌をとげて行ったか考えようとする問題提起を行うものである。

まず続縄文期の始まりから終末にかけてそれに伴出する石器群の組成，形態は刻々と変化をとげて行っている。

続縄文期の石器群について，最近の報告例より各時期の各遺跡の個々の遺構にて得られた石器組成の表を作成した（第１表)。

土壙墓内に副葬された石器群を中心としたが，恵山式土器の古い部分，さらに後北Ａ，Ｂ式土器といった後北式土器の古い部分に関しては広表された資料は，みあたらずその組成等を検討するに至らなかった。

恵山式土器の比較的新しい時期に於ける石器組成，さらに後北式土器については，後北 C_1 式土器について多くの広表された資料が実現される。

これより見れば，恵山式土器の比較的新しい段階，さらに後北 C_1 式土器に至るまでの時期には，石器類が比較的まとまって存在しているようであり，後北 C_2，Ｄ式土器に下降するとほとんどの石器類が姿を消す傾向がみられる。

恵山式土器の比較的新しい段階は，後北Ａ，Ｂ式土器に並行すると考えられている（森田 1967)。しかし単純に恵山式土器の新しい段階にみられる石器群の組成と，後北Ａ，Ｂ式土器に伴う石器群の組成を同一視して考える事は，地域差，生業基盤のウエイトの差等より無理な点が多く存在しようが，後北Ａ，Ｂ式土器の次の段階の後北 C_1 式土器に伴出する石器群の組成との比較については，鉄器類の普及の度合といった観点からすれば，充分に意味があるものとなるであろう。

作成した表は，恵山式土器の比較的新しい段階と考えられる瀬棚南川遺跡にて得られた土壙墓群

第1表　続縄文時代遺跡別石器群組成一覧

時　期	遺跡　遺構	石　鏃	銛　先	石　槍	ナイフ	削　器	ドリル	石　斧	玉	そ の 他	備　考
恵山　A	西桔梗B_1,　土壙墓	4								砥石 1	
恵山　AB	瀬棚南川, 1号住居址	4			1	1	1	2		敲石 2	
	2号住居址	1			4	6	1	3		敲石6, 擦石3,	
	3号墓	6	1			1				敲石 1	
	4 〃									石錘 1	
	5 〃	9			1	1		4	2	敲石 1	
恵山 AB,	瀬棚南川, 12号墓	31	2		6	2		1		石核1, 石皿1,	
	13 〃	15	2		1		1	1			
恵山　B	瀬棚南川, 1号墓	10			2						
	2 〃				2						
	6 〃	5			2						
	8 〃	1									
	10 〃	11									
	14 〃										
	15 〃	12			1	3					
	17 〃										
	18 〃	34	6		2	6	4	4			
	19 〃							9			
	20 〃						1	1			
								1			
後北　B	天内山,　8号墓	12			1	4					
後北　C_1	天内山,　2号墓	5			2	7					
	6 〃	10			1	6					
	十勝太若月, 8号墓					3					
	23 〃	2		2		2					
	24 〃	2		2		2			1		大形, 合葬墓
	26 〃	33	3			4			12		
	29 〃	8				1					
	34 〃	108		1		6	1				大形, 合葬墓
	35 〃	2									大形, 合葬墓
	36 〃	108		1		6	1				
	40 〃	1				3					
	59 〃	1				1					
	65 〃								4		
	82 〃		4		6	14					
	84 〃					1					
	85 〃					1					
	86 〃			1		1			4		
	89 〃		1			4					
	98 〃				1	4					

及び住居址に於ける石器群の組成（高橋他 1976）と，余市天内山遺跡（峰山他 1970），浦幌十勝太若月遺跡（後藤 1975）にて得られた後北 C_1 式土器を出土した土壙墓より伴出した石器群の組成を列記したものである。

恵山式土器の比較的新しい段階の石器群の様相と，後北 C_1 式土器に伴出する石器群の様相には大きな変化が出現している。

両者にみられる共通点は，石鏃の存在程度である。石斧類，その他と分類した敲石等の有無、ナイフ状石器と，不定形な剝片に一部細工の施こされる削器類の数量的比率の差等，差位が明確にしめされている。

石斧，敲石等は，恵山期には多くみられるが，後北 C_1 期では皆無となる。さらに入念な加工の施こされるナイフ状石器と，不定形な剝片の一部に細部加工が施こされた削器類の数量的比率が恵山期では半々程度であったものが，後北 C_1 期では，不定形な剝片に一部細部加工が施こされた削器類が特に増加し，入念な加工の施こされるナイフ状石器が極端に減少するといった点が留意されよう。

恵山式土器の比較的新しい段階の石器群，瀬棚南川遺跡の土壙墓内より得られた石器群の形状より考えるならば，ナイフ状石器，石斧等は，鉄器を強く意識して作成されている。これらの点は多くの研究者によって指摘されている所である。

つまり，鉄器類の移入は，行われているが数において行きわたっておらず，それに対する欲求が石器類の形状に反映されたと考えられよう。

天内山遺跡，2号，6号墓，十勝太若月遺跡にて得られている後北 C_1 式土器に伴出する石器群の様相は，石斧，敲石等が欠如し，入念な加工の施こされたナイフ類が減少し，これに対して不定形な剝片を利用する削器の数が増加する事が解る。後北 C_1 期では，鉄器類がかなり普及していた事が上記したことより推察される。

石斧類そしてナイフの類の石器の大部分のものは，鉄器によってその主役の座をゆずりわたし，ラフな加工の不定形な削器類がその足りない部分をおぎなっていたと考えられよう。これらの事実は，後北 C_1 期にはすでに石器主役の文化がすでに崩壊しつつある現象を端的に表現しているのである。

石鏃については，恵山期，後北 C_1 期に至るまでその形状こそ差があれ，不変的に土壙墓内に副葬されている。諸生産活動が自然に依存する狩猟，採集といった事実において，石鏃には特に重要な観点がある。江別付近における土壙墓の調査では，土壙墓内に副葬された石器群中にある石鏃について，入念に両面加工の施こされる石鏃と伴に，片岩，スレート等の剝片を三角形に折り取って石鏃を模倣したものを副葬する例がいくらか報告がなされている（河野 1933）。

河野氏は，各集団間の争い事（戦争）の為に石鏃が多量に必要となり，石鏃を模した物を入る事があったのではと推定されている（河野 1933）。

また木村氏は，鉄器類の普及の結果として，石鏃の形状に至ってまで，その加工技術が粗雑になり，石器加工の技術的な衰退を指摘している（木村 1976）。

しかし木村氏の論は，スレート等を三角形に折り取ったのみの形ばかりの石鏃が，入念に両面加

工の施こされた石鏃が副葬される土壙墓と時期的には差が無く，また同一土壙墓中に，これらの2タイプの石鏃が伴に副葬されている例（天内山遺跡第2号墓）の存在より見て，若干無理を感ずる。

しかし，本質的な問題は，そうまでして石鏃を副葬しなければならなかった精神的背景にある。つまり生産力の増化と，生産活動は，かならずしも一致したものではなく，自然に依存せざるを得ない生産形態にその基礎があった為と考えられる。つまり石鏃は，先にも若干ふれたが，他界観の中において，他の石器群とは区別し，特別な精神で考えられていた可能性が指摘されよう。

狩猟，採集といった自然に依存し一方的に収奪するのみの生産形態に，石器類が主役をしめていたのが縄文時代であるが，そこに鉄器類が移入されるとどういった意味で社会の構造に変化をきたすであろうか。

鉄器類の移入の絶体量が少ない初期においては，それを使用できる者，あるいは集団とそうでないものの間には，生産力に差が生ずると考えられる。しかし，段階的に鉄器類の移入の量が増加し，普及が行きわたって行く過程では，狩猟，採集といった自然的条件に対する依存度の高い形態の本質的な部分が変化していない限り，生産力の増加した平均化といった現象のみがもたらされるであろう。

これについては，農耕を生産形態としてとり，農耕事体に内包する共同体的作業，剰余生産物の発生といった点に於いて社会構造まで変化していく基礎を有する弥生文化と明確に区別される。

続縄文文化の基礎となる生産形態が，縄文時代より延々と続く狩猟，採集といった自然に一方的に依存する生産形態と質的に変化がなかったと仮定するならば，その社会構造及びそれを背景とする精神構造についても急激な大きな変化は生じていないと考えられる。そこに利器としての鉄器類が移入される事によって，生産力の飛躍的な増大化がもたらされる。生産力の増大化は，その社会構造及び精神構造中に内包しながらも顕在化していなかった諸矛盾を一気に露見させるといった歴史的な事例が多くある。諸矛盾とは，生産物の増加に伴って出現する，人口の急激な増加，テリトリーの範囲の拡大化，価値観の変質等であり，さらに当然それまで受けつがれて来た自然発生的な分業形態の質的変化といった点等をさしている。

生産形態の本質的な変化がない状態で，生産力のみが増大化する事実について，その社会構造に内包する諸矛盾の露見は，社会構造及び精神構造を含む文化総体に至るまで内部的に崩壊させて行く大きな要因となったであろう事は歴史的諸事例より充分に考えられる事である。

しかし，生産形態に規定される所の多い精神構造は，若干の変化はあろうが生産形態の質的変化がない状況では，保守的な部分をより多く残していたであろう。土器の文様器形の変化，他界観等が最もそれを表わしているようである。つまり，土壙墓にみられる葬法についても，大きな変化はみられない。

生産力が増大化する事は，その自然に対する依存度の高い生産形態に必然的な領域圏の拡大がまず考えられる。これは，他集団との間に摩擦を引きおこす要因をこえず有するという事であり，また鉄製品を得る為の交易の問題等は，縄文時代における領域，交易とは，大きな差違があろう事は，容易に推察される。

鉄器類のもつ側面は，石器を作製する為に原石を求めるのと質的に違い，特殊な技術的変遷をへてはじめて，鉄器としての利器の生命が与えられる。そこでは，すでに特殊な技術をもつ専業集団の存在が想定されようし，いわば分業化のシステムも，縄文時代に行われて来たような自然発生的なものとでは全く差違のあるものとして存在していた事実を示唆している。

続縄文時代では，全ての鉄製品は外部から移入されたものと考えられており，それが続縄文期に至るとほとんど全道域に普及して行った事実を考えるならば，鉄製品を得るための供給のシステムも非常に多岐にわたり大きなものであったろうと推定される。

そこで，その交易に対して特に重要と思われる事実が１つある。鉄器類の普及が全道域にまで行きわたった供給と需要のシステムの問題がある。

鉄器類を見らの力で生産する事ができない，続縄文文化のにない手たちの鉄器の需要の要求に対し，鉄器類を移入する人間たちは，当然鉄器類に対応する，同等の価値を有する生産物を要求したであろう事は，容易に推定される。多量にしかも長期間にわたって鉄器が，移入されるには必然的な事であったのである。

続縄文文化をになって来た人々にとっては，縄文時代より延々と続いて来た自然に依存する，狩猟，採集といった生産諸活動において，自らが生きる為に必要とする最少限度の生産物に加えて，鉄製品と交換する必要性から，それと等価価値を有する生産物＝商品をも生産しなければならなくなったという点である。

これは，縄文時代にも当然行われていたであろう各地域の集団間の，互いに過不足の物質を補い合ったという，交易とは形態的に変化したと考えるべきである。

鉄器類への欲求が，等価価値を有する生産物＝商品の生産へと変化させられ，さらに商品経済が外部からもちこまれた事を重要な事実として考えなければならない。

交易，つまり経済活動が，鉄製品を媒介物として，外的状況の経済的動行の変化が，北海道という辺境地域においてまで，大きな変革に導いたという事である。

Ⅳ

鉄器類へ対する，非常に高い需要をもつ続縄文時代の人々に，その交換形態の中に「商品」という新たな概念が持ち込まれた事実を前述して来た。

続縄文時代に於いては，自らが生きる為に必要とする最少限の生産物に加え商品的価値を有する生産物をも生産しなければならなくなったのであるが，そこには従来以上に生産力を高める要因が必要である。

鉄器もその主要なものの１つであるが，さらに集団内における共同作業をさらにシステム化し，社会的分業化という所へ進んで行かなければならないという事である。

共同体的組織の存在，単位は，考古学的には立証がむずかしい。しかし，その共同体的作業の１単位とその生業等については，江別兵村（後藤 1935），石狩ワッカオイ，十勝太若月等の遺跡にて発見されている，４～５体の遺体を埋葬したと考えられる合葬墓の存在が，ある程度このことを示唆

しているのではと考えられる。

合葬の土壙墓については，一時に数人の人々が亡くなった為で，土壙を構築する際に労力を節減する意で用いられた葬法であり，またそれには一度に数人が亡くなる事故があったと解される事が一般的になされている。

しかし，現在の所合葬墓が発見されている遺跡の位置は，前2者が石狩川，後者が十勝川といった大河川の河口付近である点より，サケ・マス猟といった集団で行う猟法が関連して考えられ，合葬墓に埋葬された人々の数が，共同体的作業の1単位として考えられるのではないかという推論がなされる。また，他界観の中にも共同体的作業というシステムが想定されるにまで至ったという事ではなかろうか。

大河川の河口付近の遺跡にみられた，合葬墓より，安易にサケ・マス猟を想定したが，鉄器類との交換に関連して「商品」としての生産物は，当時の生産形態より考えサケ・マスを含めた，海産物が主体をなしたであろう事は，容易に推測される。

恵山期の土壙墓より得られた石器群の様相より，魚撈に占める割合が少ないのではないか，さらにオホーツク文化にみられる専業的なものとでは大きなへだたりがある。といった論もあるが，商品経済の萌芽という点，本州経済に組み込まれつつあるという過渡期であった点より考え，魚撈的色彩は当然大きかったと考えられる。また魚撈という行為には貝類，海草等の採集も含まれ，後世における俵物の存在等より考えこれについての比重も決してあなどれないものがあるのではなかろうか。

さて木村氏は，恵山期にみられる特徴的な石製ナイフを取りあげて，その分布がサケ・マス猟の分布圏とかさなり合っている事を指摘している（木村 1976)。

サケ・マスに対する依存度は，縄文時代よりかなりの比重をもって続縄文時代に至っていると思われ，アイヌの人々と和人との交易の主体を占めたサケ・マス等の存在は当然論議されるべき問題であろう。

さらに木村氏は，続縄文時代に於ける生産活動のシーズナリティの問題をも述べている。

縄文時代においては，貝塚の自然遺物の研究及び，竪穴住居址の廃絶のパターン化の分析について，土器，石器の廃棄，貝殻等の遺棄といった各システムより季節性の問題が指摘されている（小林 1974)。

筆者も縄文時代中期の竪穴住居址内に廃棄された石器群のグループ別分布状況より，各グループ間における石器組成の差より，廃棄された時間の差，季節的な差があるのではないか考えた事があった。縄文時代中期に於いては，すでに季節的な自然条件に即応した生産活動のサイクルが存在したと考えている（羽賀 1977)。

自然に依存した狩猟，採集等といった生産活動が質的に変化していない限りにおいては，その規模の差こそあれ続縄文時代においても同様の論があてはまるであろう。

ともあれ，続縄文時代は鉄器への欲求より，商品経済を受け入れ，本州に於いての稲作農耕を基本として発展した，商品経済の体系に組み込まれ，特産物を生産する一地方として受け入れられて

行ったという点は，見おとせない事実である。これは，木村氏も指摘する本州経済への従属化という事と同様の意をもっている。

さらに文化的内容については，本州のそれと比して，異質なものとされ，ますます孤立化し，続縄文文化を内部的に崩壊させていく大きな要因となったであろう事が付け加えられる。

（羽賀　憲二）

第2節　土器について

北海道の縄文時代晩期の土器のあり方について，道南部では東北地方との強いつながりの見られる大洞系土器の存在を介して，かなり明確な理解が進んでいる。また，道央，道東地域にあっても，同じような大洞C_2式あるいはA式土器以降の介在のもとに，明らかにされている部分も多い。しかし，この地方の大洞C_2式，A式土器以前の土器については，その存在さえも，かなり不明確な形でしか捉えられていない。また，大洞C_2式，A式土器の介在を通して知られている土器群の様相にしても，道央部のいわゆるタンネトウL式土器，道東部のヌサマイ式土器，緑ヶ丘式土器と総称されて古くから知られている一群も，その名称がつけられて以来，かなりの時間を経過して，資料の増加等により再吟味を加える時期に至っているといえよう。

特に，石狩低地帯を中心として，タンネトウL式土器と総称されきた該期の土器群は，千歳市ママチ遺跡（石川，佐藤ほか 1971），札幌市T 210 遺跡（上野編 1976）等の資料を通して見た場合，かなり時間的な幅をもって捉えることが可能であると思われる（加藤 1976）。

ただ，道央部の該期の土器群を考える時に，常に大きな問題としてかかわりを持ってくるのは，道南部におけるいわゆる日ノ浜式土器と道東部のヌサマイ式土器，緑ヶ丘式土器の存在であろう。この三者については，いづれも概報程度の発表のみであることから，第三者にはその詳細について，検討を加えることが困難であるという大きな問題がある。

道央部の該期の土器の成立が，これらの土器の介在なしには，成立しえなかったであろうことを考えると，これらのすべての遺跡出土の精製土器は言うに及ばず，粗製土器をも含めた詳細な検討を加えた上でなければ，何事をも語り得ないであろう。あえてそれを無視して，道央部の該期の土器を中心として取りあげて，何かを語ったとしても，それは砂上の楼閣でしかあり得ないであろう。

しかしながら，ここでは，あえてその危惧を無視し，今後の道央部における該期の土器を理解するうえでの，ほんのささやかな一助にでもなればと思い，現在整理することの可能な問題点のみ取りあげ，若干のとりまとめを行ってみたい。

なお，この節のなかで記述している土器の挿図番号，あるいは図版番号は，紙数の関係で必要挿図を作成していないために，出典文献の番号そのままを使用することによって，その説明する土器を明示する方法を取っている。

道央部の縄文時代晩期末葉に位置する土器で，最も良好な資料の一群として挙げられるものに，恵庭市柏木川遺跡（藤本，高橋 1971）Pit 45 出土土器がある。この遺跡では，樽前火山灰c層（以

下，慣例に従いTa－a，b，c等表記する）を含む耕作土直下の黒色土上面からほとんどの土器が出土しているという。Pit 45からは，ほぼ完形の土器が6個出土している。墓壙に埋葬してあった土器という特殊な性格を考えたとしても，これらの土器が，時間的に同一時期か，あるいは極めて近接した時期に用いられていた土器のあり方を示すものと見て誤りはないであろう。

土器の特徴は，口唇に2個1対の突起を有し，口縁部の直立する深鉢型土器で，一種の工字文を作出するもの(2)，1個の大型突起を有し，この部分を沈線で囲み三角状の無文帯を形成し，以下刺突文，沈線文と工字文との組み合せによるもの(4)，幅広い沈線と半截竹管工具による刺突を主体とし，口唇に2個1対の山形突起を有する土器(1)，双口土器で三叉状文の崩れた雁股状の無文帯と刺突文の多く施文される土器(3)，深鉢形土器で口縁部に繞らす沈線と刺突文の土器(5)，口縁に垂下する逆Y字状の貼付帯と沈線文，刺突文を用いるもの(6)である。これらの土器のうち，(2)は，道南地方からの移入品であり，大洞C_2式ないしは大洞A式土器に対することが可能であるという。

道南地方の大洞系土器の影響が顕著に見られる例で，柏木川遺跡Pit 45出土土器に近い時期に求められる土器を出土する遺跡として，千歳市駒里遺跡（石川・金山1970）がある。駒里遺跡の土器の出土状態は，Ta－c層を間層として狭み，その上層と下層の両方から非常に近似性を有する土器が出土している。柏木川遺跡の出土土器が，少なくともTa－a層とTa－c層を含む耕作土の下層から出土している事実からすれば，柏木川遺跡出土土器が，駒里遺跡上層出土の土器と同一時期のものと言えないことは明白な事実として捉えなければなるまい。

しかしながら，駒里遺跡下層出土土器と柏木川遺跡出土土器との比較を行なった場合，両者の間にはかなりの差異が見られる。例えば，駒里下層出土のものには，大洞系土器の影響を受けたと思われる精製土器が少ない点，刺突文を有する土器の少ない点などが，あげられる。だが，この両遺跡の出土土器のうちで，主体を占めるものは，沈線文と縄文，あるいは，縄文のみの土器であり，単純にこれらを比較した場合，縄文の施文方法がRLとLRの両方が見られ，口縁部の内側に撚紐の押圧，あるいは縄文を施文し，口唇に刻みを有するものが多いという共通点を指摘することができる。しかし，粗製土器のこのような特徴は，この時期の土器一般に見られるものであり，この事実をもって，この両者が同一期の所産であると断定することは不可能である。ただ，後述するように，柏木川遺跡出土土器のほうが，やや多く新しい要素を有しているところより，駒里遺跡下層出土土器の方が，やや古く位置づけられるかもしれない。

さて，そこで目を転じて駒里遺跡の上層と下層出土土器について見ると，その組成には，若干の差異を見い出すことができる。前述のような下層出土土器に対して，上層出土土器の特徴は，刻みを有する貼瘤と沈線，幅広の無文帯，数段にわたる工字文風の文様が見られ，裏面にも沈線と縄文及び刺突を施文する土器(1)，幅広の無文帯と刺突文及び突起部に見られる，いわゆる縄線文の土器(5)，鋸歯状の沈線と刺突によるもの(6)，沈線を粗雑に用いて，その一部が工字文様の形をつくるもの(4)などがあり，図示されるもののすべてが，口縁裏側に，縄文あるいは縄線文が見られる。また，出土土器の特徴を示す表で見る限りにおいても，上層出土土器には，刺突文を有する土器，口縁内側に文様の施文する例が，かなり多く見られるようである。

特に，上層出土土器の刻みを有する貼瘤文土器の存在は下層出土土器，柏木川遺跡出土土器には，これを全く認めることができない。ただ，総体的な特徴から見るならば，刺突文土器の存在，沈線文の発達した様相，大洞系土器の影響の強さ等から捉えるならば，下層出土土器よりも，柏木川遺跡出土土器に，やや近いものと言えよう。このような事実の指摘は，長沼町タンネトウ遺跡（野村1962）出土土器との比較においても捉えることができる。

タンネトウ遺跡出土の土器は，タンネトウL式土器として，晩期末葉に位置づけられて以来長くその名称が用いられ，今日では晩期末葉の土器一般に広く使用される傾向にある。その特徴は，いわゆる工字文風の文様を主体とするもの（第13図1，4），稜杉状の沈線と工字文様の組み合せを主体とするもの(2)の一群と，沈線を区画するような状態で刻みのある貼瘤文を用い，これに幅広の無文帯を配するもの（3，5，6，8，）の一群がある。後者のものは，口縁部の突起部に縄文帯をもって，三角形状の無文帯を作出する土器(8)の同一破片なのかもしれない。この二者のうち，前者については駒里遺跡下層出土土器には，全く見ることができず，柏木川遺跡，駒里遺跡上層出土器に見ることができる。後者については，柏木川遺跡，駒里遺跡上下層出土土器ともにその存在を全く見ることができない。ただ，前者の土器の文様の存在は，駒里遺跡上層では，後者の土器のもつ貼瘤文をともなって同一土器に存在することが知られており，更にタンネトウ遺跡A発掘地区附近（第16図51）からも，この種の土器の発見が知られている。タンネトウ遺跡出土の前述の2群の土器が供伴するものであるか否かについては，不明であるが，刻みを有する貼瘤文をもつ土器のみを取り挙げれば，次のように指摘できる。

この貼瘤文を有する土器は，現在までの資料によれば，前述のとおりTa－c層の下層から発見される晩期の土器には，その存在を全く認めることができず，Ta－c層の上層出土土器に至って始めて見ることのできるものと言えよう。更に，この貼瘤文は駒里遺跡上層出土土器に見られる工字文との組合せから，ママチ遺跡，札幌市T 210遺跡（上野編1976）出土のものに見られるような，貼瘤と沈線との組合せによる土器へと変化して行くのであろう。

タンネトウ遺跡出土の他の要素を有する土器群としては，鋸歯状，あるいは波状の沈線を主体とするもの（第15図），表面縄文で口縁裏面にいわゆる縄線文を施文するもの（第14図）に加えて，報告書には図示されていないが，野村崇氏の好意により実現させていただいた未発表資料のなかには，刺突文を用いる土器がかなり存在している。このような土器の組合せを見る限り，刺突文を多く使用するという点では柏木川遺跡出土土器に，沈線文の発達と土器内面に文様の施文される点では駒里遺跡上層出土土器に近いものと言うことができる。

以上の結果に基づき，前述の事実を一言のもとに述べるならば，巨視的には古い方から柏木川遺跡出土土器→駒里遺跡上層出土土器＝タンネトウ遺跡出土土器の順で捉えることができよう。これを更に微視的に見た場合，同じTa－c層下部から出土している柏木川遺跡出土土器と駒里遺跡下層出土土器とでは，柏木川遺跡出土のものが，Ta－c上層出土土器により近い要素を有していることから，前者の方が後者より新しい時期に求められる可能性も指摘できる。またタンネトウ遺跡出土土器についても，いわゆる工字文風の文様を有する土器と，刻みを有する貼瘤文と沈線土からなる

る大洞式土器系統のものと，いわゆる北海道的な土器との要素が複雑に混じ合っていて，一言のもとに時間的な結論のみを求めることは不可能であろう。いづれにせよ現時点では，その資料の絶対量が不足しているために，今後の資料増加を待ちたい。

尚，柏木川遺跡出土土器に近いものとしては，札幌市S 268遺跡（羽賀，内山1977）出土のものがある。この遺跡のいわゆる大洞系の土器は，台部に2個一対の窓を有する台付鉢で，いわゆる三角工字文に近い文様を持つ。これに伴う粗製土器は，縄文のみのもの，あるいは，浅鉢型土器の突起部に指頭状の撚紐の圧痕の見られるものなどが若干見られる。

次いで，これらの遺跡出土土器に近い様相の土器群を伴いながら，明らかに区別されるであろう土器を出土する遺跡としてママチ遺跡出土の一群がある。ママチ遺跡では，Ta－c層の上層からすべての土器が発見されている。それらは，駒里遺跡上層出土土器に見られた刻みを有する貼瘤と工字文との組合せによる土器（第36図4，7），タンネトウ遺跡出土土器に見られる刻みのある貼瘤文を有する土器（第13図，第36図11）が出土しているし，精製土器，ならびに浅鉢形土器の口縁部内面に文様が施文される例が多い点では，タンネトウ遺跡出土土器に近似している。以上の事実の摘出のみを見れば，この三遺跡の土器は，同一時期に求めることもできよう。

しかし，このような近い様相を示しながらも，刺突文を施文する土器の出土頻度が低いこと，鋸歯状文，波状文等の沈線文土器が少ない点などからすれば，駒里遺跡上層，タンネトウ遺跡出土土器とは，一線を画することが可能と思われる。また，このような考えは，次のような事実からも十分窺うことができよう。即ち，ママチ遺跡出土の土器では，この遺跡独自に見られる要素，あるいは，明らかに新しい時期に連なると思われる土器に見られる要素をかなり摘出することができる。例えば，結節沈線の見られる土器（第36図8），口唇上に沈線のつけられるもの（第36図6），口唇の突起部に流れる沈線と平行及び波状沈線の組み合によるもの（第34図5），複数の沈線による連続菱形文を作出ことにより変形工字文に近い効果を見せる土器（第24図1，第25図3），稜杉状の沈線文（第6図1），波状沈線と平行沈線により構成される三角形状の文様（第34図2）とこれに伴う非常に雅拙な台付鉢（第34図4）などである。これらの土器がすべて同一期のものとする保障は全くないが，沈線の施文方法が施文具を土器面に対して，下方から斜めに押圧して施文するという共通技術を有する点などから考えると，かなり多くの土器が同一時間内に捉えることができよう。また，同一時間内に捉えることのできない土器を摘出できるとしても，かなり密着した時間的な関係に置くことができようか。

ママチ遺跡出土の土器が，同一時あるいは，それに近い関係の範囲内で捉えることができるという前提に立つならば，その位置する時間は，前述のように駒里遺跡上層，タンネトウ遺跡出土土器と密接な関係を持ちながらも，これらより新しい時代に置くことができよう。何故ならば，ママチ遺跡出土土器に見られた文様要素のうちで，菱形文の連続による変形工字文風の文様を作出するもの，波状沈線と平行沈線による三角形文を構成する土器，口唇の突起部に流れる沈線を有する一群の土器は，札幌市T 210遺跡で，東北地方あるいは道南地方から移入されたと思われる大洞A′式土器と二枚橋式土器の中間に位置すると思われる土器と供伴するであろう事実から，他の文様を有す

土器より，より新しい文様要素として指摘することが可能であろう。

札幌市T 210遺跡では，前述の移入品と思われる台付鉢（第32図178）の出土と，確たる証は得られていないが，これに伴うであろうと考えられる土器群には，次のようなものがある。第Ⅲ群土器が該期に当るもので，第1類は，菱形文の連続による変形工字文風の文様を有する土器（第27図15，第54図155～159），第2類土器で平行沈線と波状沈線により三角状のモチーフを形成する土器（第54図160～166），口唇の突起部に沈線の流れる土器（第54図167，168），第6類とする平行沈線と刻みのある貼瘤の見られる土器（第54図186～189，第55図190～196）で，ママチ遺跡出土土器に近似する土器群である。そのなかでもT 210遺跡第2類土器とするものは，ママチ遺跡出土のものより，かなり精巧な文様構成を有している。これに対して，T 210遺跡出土のものに見られて，ママチ遺跡出土土器に見られないものとしては，第3類（第54図170～174），第5類（第54図182～185）土器とするものがある。第3類土器は，沈線による一種の工字文風の文様を作出するものであり，第5類土器は，複数の（　）状の沈線と横位の沈線によるものである。この第3類，第5類土器とするものは，T 210遺跡出土土器よりも古く位置すると思われる遺跡出土土器には，全く見られなかった要素である。また，土器の総体的な特徴から見ると，ママチ遺跡出土の土器よりは，一段階新しい土器として捉えることが可能であろう。

例えば，T 210遺跡第3類土器は，沈線の施文される部分に縄文を施文するという点を除けば，新冠町永川遺跡（愛下，橋本ほか1975）の第4群第3類（第43図41～49第44図）に近く，第5類土器は，同じく永川遺跡第4群第3類（第43図50～52），静内町大狩部遺跡（藤本1961 b・G類1，2）等に通づるものとして理解することが可能であろう。

永川遺跡では，これらの土器に加えて，東北地方の二枚橋式土器に近い文様を有する土器（第45図59，62），いわゆる雅拙な模倣的な工字文（第45図65～70，第46図71～79）等の出現を見ることができること，更に加えて，T 210遺跡より古く位置すると見られる時期の土器に，普遍的に見られた舟形土器の姿が見えないこと，精製，粗製の土器ともに口縁裏面の文様が，非常に簡略化されていること等から，これをT 210遺跡出土土器より後出のものとすることに異論はないようである。

尚，従来からこの時期の代表的な土器として，大狩部式の名称を冠せられて来た大狩部遺跡出土土器については，その出土数があまりにも少ないために明確になし得ない部分が多い。しかし，大狩部遺跡の報告書（藤本1961 a）を見ると，永川遺跡第4群第4類に共通するものとして，大狩部遺跡第3群（第3図Ⅰ，10～12）などを挙げることができ，この両者は，ほぼ同一時間内の所産として捉えることが妥当であろうと思われる。

以上，概観してきた如く，道央部における縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭にかけての土器は，第2表に掲げる如くに編年することができるであろう。

ただ，この編年を作成するにあたって使用した遺跡の土器は，そのいづれが単一時間内の供伴関係にあるとする確実な証は持ち合せていない。また，各遺跡出土土器のいづれもが相互に相通づる文様要素を有する土器が見られることにより，近い将来の良好な遺跡の発掘調査結果によっては，それらが摘出されて，更に新しい編年が組み立てられる可能性も非常に大きなものであろう。ここ

では，特に各遺跡出土土器の供伴関係が不明であり，型式名を設定しうるに足る確証が得られなかったために，将来への混乱をさける意味あいからも，新たな型式名称は一切用いず，単に遺跡名を示すことによって，その変遷を述べるのみにとどまった。

さて，前述の変遷に従って，いわゆる粗製土器としての一般的な概念で捉えられる土器について，若干の説明を加えたい。

従来，いわゆるタンネトウL式土器と呼ばれていた土器群の粗製土器の概念は，舟型土器，口縁部の突起部あるいは内側部に撚紐の押圧されたもの，あるいは縄文の発達した浅針形土器，深鉢形土器，いわゆる縄線文の用いられる土器等である。

柏木川遺跡出土の粗製土器は，口唇部の刻み，撚紐の原体の横位，縦位の押捺，縄文等が主体であり，タンネトウ遺跡のそれに見られるような複雑な文様を施文する例は，あまり見られない。現在までの資料で知り得る限りでは，浅鉢形土器の突起部，あるいは内面に複雑な文様を施文する例は，タンネトウ遺跡出土土器の頃に，その開花期が見られる。ママチ遺跡出土土器の頃に至ると，波状を呈していた口縁が大型の突起へと変化し，文様も複雑になり（第10図，第35図），更に，札幌市T 210遺跡出土土器に至って，突起がやや小型になる（第56図239～255）ようである。そして，永川遺跡出土土器の時期には，このような浅鉢形土器は，姿を消す傾向にあるように窺える。この浅鉢形土器の変遷から見ると，この間にもう一つの時期が介在する可能性も考えられる。

次いで沈線文系の土器では，柏木川遺跡出土土器の頃には，横走の単純な沈線が主体であり，他の沈線文では，Pit 50出土土器のような三叉文の崩れたような沈線が見られるのみである。それが，タンネトウ遺跡出土土器になると，鋸歯状の横位沈線（第15図）が増え，ママチ遺跡出土土器では，波状沈線が増加する。またママチ遺跡出土土器では，沈線文の種類も多くなり，縦位の波状沈線で横位の沈線を区画するもの（第34図3）が出現し，札幌市T 210でも，これに類するものが数点（第55図203，204）見られるが，永川遺跡出土のものでは，全く見ることができない。

土器の表面にいわゆる縄線文を施文する土器は，永川遺跡出土のものに多く見ることができ，それ以前の土器には少ない。

舟型土器は，タンネトウ遺跡，ママチ遺跡，札幌T 210遺跡出土土器の時期に存在するが，その他の時期では，現在のところ報告例がない。

以上述べてきたような道央部の土器の変遷に対して，道東北部，道南部の土器がどのような係わりを持つものであるか，次に簡単に触れてみたい。

道東北部に見られる晩期縄文文化末葉の土器との関係を述べるなかで，特に留意を要する点は，前述の道央部の一群の土器のなかに見られる鋸歯状，波状の沈線文土器，表面および裏面に複雑ないわゆる縄線文による文様の施文する土器，舟形土器等の出自が何拠にあるかについてであろう。

まず地域的には道央部とすることが可能でありながら，その有する特異性から道央部の編年仮説の作業のなかから意識的に除外したものに，栗山町鳩山遺跡第3地点（野村1964・1965）出土土器がある。報告者は，これらの一群の土器を，いわゆるタンネトウL式土器（タンネトウ遺跡出土土器）に後続するものとして捉えている。鳩山遺跡第3点出土の土器に見られる沈線は，ママチ遺跡

出土土器に見られる沈線の施文手法に極めて近いものであり，更に，これが一本の沈線が完全に器面を周繞することなく，何本かに切断される点においても共通点を見い出すことができる。文様そのものについても，沈線による工字文風の文様（栗山町の文化財第14図79）に見られる土器，突起部に流れるように沈線を施文する土器など共通点も多い。ただ，沈線の連続弧状文（石器時代7，第6図31～33ほか）の施文される土器は，大狩部遺跡出土土器に見られるものと同一のモチーフと言えようか。

以上の如く，ママチ遺跡，大狩部遺跡等の出土土器に近い要素を持ちながらも，これらには全く見られない強烈な個性を有する一群の土器の存在も見られる。横位の沈線に対して，縦位の波状あるいは直線の沈線を配する一群である。この種の土器は，ママチ遺跡，札幌市T 210遺跡出土土器に，わずか数点を見るのみであり，明らかに異質な一団として捉えなければならない。残念ながら現在のところ，このような文様を有する土器を出現させる母体となったものの存在を見ることができない。ただ想像をたくましくすれば，柏木川遺跡Pit 45出土土器(5)，駒里遺跡下層出土土器(12)のような土器に，その系譜が得られるのかもしれない。

ともあれ，かなり不明な部分を含みながらも，鳩山遺跡第3地点出土土器の多くは，ママチ遺跡出土のものに極めて近い位置に，その時代が求められることになると思われる。

大洞式土器の強い影響の見られるいわゆる日ノ浜式土器の出土は，釧路地方でもその出土を見ることができる。道東域の該期の研究については，すでに長年にわたる沢四郎氏の業績があり，多くの問題点が明らかになりつつある。いわゆるヌサマイ式土器，緑ヶ丘式土器などの存在がそれである。ただ，この両形式ともに精製土器に関しては，各種刊行物に多くの発表がされているが，粗製土器の多くは，文章表現をもってのみの発表であるために，私自身の理解が十分でないために，かなりの誤認もあると思われる。

いわゆる，ヌサマイ式土器と呼ばれる一群には，道央部の柏木川遺跡Pit 45出土土器に見られるような，工字文風の文様を有する土器が伴出することは，かなり一般的に知らされている（吉崎1971）

ヌサマイ式土器の次の段階とされる緑ヶ丘式土器は，現在まで公表されている資料によれば，やや複雑な様相を示すようである。

例えば，貝塚町1丁目遺跡（沢，西ほか1974）の8A号，8B号住居跡の発掘結果によれば，いわゆる緑ヶ丘式土器は，若干の時間幅を持ったなかで営まれたものであり，将来は明確に少なくとも二つ以上の時期に分けることが可能であると思われる。私の知る限りでは，このような捉えかたについては「釧路川流域の先史時代」（沢1969）のなかで，緑ヶ丘式土器を縦位の時間差を示す状態で編年表を表わしていることから，早くから沢氏の意識のなかでは，かなりの時間差を有するものとして緑ヶ丘式土器を認識していたであろうことが推察される。

ともあれ，貝塚町1丁目遺跡の8B号住居跡の窪みを利用して構築されていた8A号住居跡出土の口唇の刻みと，沈線による工字文風の文様と刺突を主体とする土器（第26図1）は，道央部の永川遺跡第4群第4類土器（第46図71～79）に近似するものであり，両者の時間的位置は，それ程大

きな差はないものと理解できよう。

8Ｂ号住居跡床面からは，弧状沈線を配し，その空間を埋める状態で平行沈線を施文する土器（第26図７）が１片出土しているのみである。この種の土器は，永川遺跡出土第４群第３類土器（第43図41～45）に同じであり，更に，第４群第３類の第44図53～58に図示されるものに近い。また永川遺跡出土土器より，やや古く考えているＴ210遺跡第Ⅲ群第２類土器（第54図160～166），幌倉沼遺跡出土土器（第62図１～４ほか）などにも類似するものを求めることができる。

このような貝塚町１丁目遺跡の調査結果を肯定しうる資料としては，白糠町オンネチカツプ遺跡（沢，富永1966），釧路市フシココタンチャシ（沢，西ほか1975），斜里町チプスケ遺跡（佐藤・田沢ほか1959）がある。

オンネチカツプ遺跡出土の土器は，弧状の沈線によるもの（第５図10，12），太い沈線によるＹ状の文様に，細い横位の沈線を配するもの（第５図11），綾絡文の見られるもの（第５図６）等が主体であり，貝塚町１丁目遺跡８Ａ号住居跡出土土器に見られるような土器の存在は，これを全く見ることができない。

フシココタンチヤシ発見の土器は，報告者によれば，緑ヶ丘式土器よりも後出のものとして理解されている。私は，緑ヶ丘式土器そのものの実態を明確に把握しえないでいるために，大きな誤認もあると思われるが，その主体は，貝塚町１丁目遺跡８Ａ号住居跡出土土器に非常に近似するものであり，緑ヶ丘式土器に含めて捉えることに大きな誤りはないかと思う。そして，これらの土器は，総体的に見て永川遺跡出土土器と同一組成と見ることができよう。

ついで，チプスケ遺跡第２文化層出土土器も，沈線による単純な工字文風の文様を主体（第13図版AB 47，Ｄ－６，AB 16ほか）としており，貝塚町１丁目遺跡８Ａ号住居跡出土のものと同一のものか，やや新しい資料として捉えることができようか。

最後に緑ヶ丘遺跡出土のもので，古くから緑ヶ丘式土器と呼ばれている土器群のなかにも沈線による菱形文を作出する土器と，同じく沈線による工字文風の文様を有する土器が見られる（釧路川流域の先史時代第16図）。前者の土器は，道央部のＴ210遺跡第Ⅲ群第１類土器（第54図156～158ほか）に見ることができるものであり，後者の土器は，貝塚町１丁目遺跡８Ａ号住居跡出土土器に類し永川遺跡出土のものに多く見られるものである。

以上，道東域の該期の土器について概観してきたが，これらの土器が道央部の土器群とどのような関わりを有するものであるか，簡単に触れてみたい。

いわゆるヌサマイ式土器と呼ばれている土器については，いわゆる日ノ浜式土器を供伴する明確な事実において捉えられているために，道央部の柏木川遺跡Pit 45出土土器に極めて近い位置に求められることは間違いがなかろう。ただ，ヌサマイ式土器のなかの，いわゆる粗製土器（ここでは大洞式土器的でないという単純な意味合いの）のなかに，柏木川遺跡出土土器に見られるような刺突文を多く用いる土器が存在するか否か吟味する必要もあろう。また，大洞系土器の影響が，それ程強く見られないが，いわゆるヌサマイ式土器の範囲に捉えられている常呂町栄浦遺跡ホ号住居跡（佐藤1972）出土土器を見ると，柏木川遺跡Pit 45出土土器などには見られない点がかなり存在す

る。例えば，浅鉢型土器の突起部の文様が複雑に施文される点，器面の沈線文が発達している点（Fig 277－1，2）などが指摘されよう。このような傾向は，道央部の土器のなかでは，ママチ遺跡出土土器に最も一般的に見られるものである。更に，深鉢型土器に見られる文様要素では，円形の刺突間を連ねる沈線（Fig 276－2），横走沈線を縦位の沈線で区画するもの（Fig 275－1）など鳩山遺跡出土土器に近いものなどが見られる点などからすると，いわゆるヌサマイ式土器も，やや時間幅を持ったなかで捉えなければならぬのかもしれない。

緑ヶ丘式土器としたものは，前述の如く，今後は少なくとも数形式に分類されるであろう。緑ヶ丘式土器の古い要素と見られる，貝塚町1丁目遺跡8B号住居跡床面出土土器及び，オンネチカップ遺跡出土土器は，T 210遺跡第Ⅲ群土器に近い位置に求められ，新しい要素とするものは，永川遺跡出土土器と同時期に置くことができよう。

さて，上述のような大洞系土器の影響を明らかに読みとれる土器群とは，かなり異質な一団が上川地方から北部に見ることができる。妹背牛町メム川遺跡（高橋，野村 1972），東川町幌倉沼遺跡（佐藤 1966）出土土器である。

メム川遺跡出土土器の様相としては，鳩山遺跡第3地点出土のものに，かなり近い土器（第7図50～57ほか）が見られる。ただ，鳩山遺跡出土のものは，すべて平行沈線を区画する如く状態で縦位の沈線を施文しているが，メム川遺跡出土のものは，複数の沈線で描く菱形文の上の角から下の角にかけて施文するものが多い。また，舟型土器の場合には，この沈線が縦長の貼付帯にとってかわる場合が多い。更に複数の沈線による菱形文と弧状の沈線文（第7図42～47など）を多用するところは，T 210遺跡第Ⅲ群，第2類土器に近いと言えようが，T 210遺跡出土のものに比して，沈線文が規格的であり，刺突を多く用いる点に差が見られる。これらの事実からすれば，鳩山遺跡出土土器よりはやや新しく，T 210遺跡出土第Ⅲ群土器よりは，やや古く位置づけることが妥当であろうか。

幌倉沼遺跡出土土器は，沈線による弧状の文様（第54図ほか），波状の沈線との組み合せによるもの（第62図1～3，第92図2ほか）のように，T 210遺跡第Ⅲ群第2類土器，永川遺跡第4群第3類土器に見られるものに類似するもの，同様なモチーフながら沈線のかわりに縄線文を用いる土器（第18図6～11）。波状沈線を組み合せることにより一種の崩れた菱形文を作出する土器（第96図，第76図など）で，T 210遺跡第Ⅲ群第1類土器の変化した如く状態の土器などが見られる。舟型土器で，複数の沈線による菱形文を形成し，それを縦位に分断する貼付帯を有する土器（第69図，第77図5など）は，メム川遺跡出土土器にも見られる手法である。この土器の編年的位置は，メム川遺跡出土土器よりは，明らかに新しい時期に求められよう。道央部の土器との関連を見ると，永川遺跡出土土器ほどには新らしい要素が見られないところより，T 210遺跡第Ⅲ群土器に近い位置に置くことが最も妥当であろうか。

次いで，上述の土器群を大洞式土器との関連について，一言のもとに述べるならば，次に要約されよう。道南部の日ノ浜式土器は，従来発表されている資料のみについて言えば，大洞A式土器と平行に捉えられると言われる（鈴木 1974）。また，S 268遺跡出土土器の台付鉢の台部に見られる窓

は，大洞A式期に至って見られるようになるという指摘（芹沢 1960）からすれば，柏木川遺跡 Pit 45 出土土器の時期のものは，大洞A式土器と平行関係にあると言えよう。

次いで時期の明確に出来るものとしては，大洞A′式土器と二枚橋式土器の中間くらいに求められる台付鉢を出土するT 210 遺跡第Ⅲ群土器がある。

そして永川遺跡第4群土器は，東北地方の二枚橋式土器に極めて近いものとして捉えられるのが一般的なようである。

上述の冗長に述べてきたことを一言のもとに要約すれば，第2表の如くなる。

尚，最後になったが，N 199 遺跡出土の晩期縄文時代の土器は，上述の編年に従えば，柏木川遺跡 Pit 45 出土土器の時期に最も近いものと言えよう。

以上，道央部の縄文時代晩期後半の土器を中心として，稿を進めてきた。最初にも述べたように，この稿を進めるにあたっては，各遺跡出土の土器を一括して取り扱った。しかしながら，それらの土器が同一時期の所産であるとする保障はどこにもないし，それぞれに古い要素を有しているもの，新しい要素を有しているものなどを見ることができ，今後の資料によっては，それぞれが独立した一つの時期に営なまれたものとして，捉えることも可能になるかもしれない。ともあれ。今後は，良好な遺跡の発掘を通して，確実に同一期のものとして捉えられる土器群を，正確に摘出する作業を押し進めていかなければなるまい。

また，道央部の精製の大洞系土器を伴出する粗製土器（大洞的でない土器）の詳細な分類を実施することにより，道東北部の該期の土器群の様相を，かなり明確化することができるであろうし，また縄文の施文そのものを取っても，RL の多い遺跡（時期），LR の多い遺跡（時期），両者が対等に見られる遺跡（時期）など，かなりのバラエティを見ることができる。今後は，これらの問題をも十分にふまえたうえで，更に検討を進めて行きたい。

該期の土器群が道央部では，ともすれば「タンネトウL式土器」として，安易に一括して処理されてきたこれまでの考え方に対して，一石でも投ずることになればと思い，誠に不十分ながら本稿を発表した。

第2表

柏木川遺跡	駒里下層（？） 美々4遺跡ⅡB層 S268遺跡 N199遺跡		ヌサマイ（常呂栄浦遺跡ホ号住居跡）
Ta−c			
駒里上層	タンネトウ遺跡A地区 美々4遺跡ⅠB層		
ママチ遺跡	鳩山遺跡第3地点		
		メム川遺跡	
T210遺跡			緑ヶ丘古：オンネチカップ遺跡 貝塚町1丁目8B号住居跡
		幌倉沼遺跡	
永川遺跡			緑ヶ丘新：貝塚町1丁目8A号住居跡 フシココタンチャシ チプスケ遺跡

追　記

本稿を終えてから，北海道教育委員会発行の美沢川流域の遺跡群Ⅰ（森田・畑ほか 1977）を入手した。そのなかで美沢1遺跡，美々4遺跡から晩期縄文時代の土器が出土している。特に美々4遺跡では，樽前山c火山灰（Ta－c）を中間に挟んで，上層ⅠB層と下層ⅡB層から該期の土器の出土が見られる。

このような土器の出土の事実は，駒里遺跡でも見られるとともに，Ta－cを介在させることにより，その年代を推定しうる遺跡としては，この下層に遺跡の営なまれる柏木川遺跡，上層に見られるママチ遺跡などがある。

美々4遺跡ⅠB層からの出土土器を見ると，縦の刻みの貼瘤文と胴部に見られる数段にわたる工字文を有する土器（第76図51）で駒里遺跡上層，タンネトウ遺跡，ママチ遺跡出土土器などに共通する文様が見られる。また沈線文系土器のなかには，横位，縦位の鋸歯状，波状の沈線の土器（図74－10～19）などタンネトウ遺跡，鳩山遺跡出土土器に近い要素も存在する。また，幅広の無文帯と，この上下に施文される刺突文の土器（図75－32，33），刺突文と沈線による土器（図75－30，34など）など柏木川遺跡，駒里遺跡下層出土土器に見られる古い要素の見られるものの存在が認められる。これに対して，ママチ遺跡，T 210遺跡出土土器に見られる沈線による菱形文や，刻みを有する貼瘤文のみの見られる土器の存在がないところから，ⅠB層出土土器は，駒里遺跡上層出土土器に最も近いものとして捉えられよう。

Ta－c層下部のⅡB層から発見される土器は，図120に代表されるような刻みをもたない瘤により区画される沈線と工字文との組み合せによる，いわゆる大洞A式土器の影響を強く受けた土器群を主体とするものである。このような土器は柏木川遺跡，S 268遺跡などでも見ることができる。しかし、これらの土器に伴なう他の土器群は，従来知られていた土器群とは，かなり異なるものが見られる。例えば，柏木川遺跡出土土器に見られた如くの刺突を多く用いる土器が少ない（図118－351，364など）かわりに，いわゆる縄線文を使用して，土器表面に指紋状の文様を作出する土器（図118－354），ならびに裏面にも同様な文様を施文するもの（図118－359，図119－389など），単純な縄線文（図119－371～378），縄線文と沈線によるもの（図118－364～370）などの出土や見られることである。

現在までに知られている指紋状の縄線文は，従来の資料では，ママチ遺跡，T210遺跡出土土器の頃が主体であり，先に，この時期に最も盛行したモチーつであろうとして捉えた。しかしⅡB層出土の土器を見る限りにおいては，その最も盛行した時期は，Ta－c層下層に遺跡の営なまれた頃であり，それが新しくなるにつれ，土器の内面にのみ，その痕跡をとどめるようになったと理解することができるようである。

（加藤　邦雄）

第7章　結　　語

本遺跡の発掘調査によって得られた諸事実については，各章，各節にわけて述べてきたとうりである。

本遺跡よりの出土遺物は，縄文時代晩期に属する土器群を主に，縄文時代中期，続縄文時代末期の土器，石器がごく少量得られている。さらにこれに伴う遺構としては，続縄文時代末期の土壙墓と考えられる円形を呈するピット群が19個検出されている。

前述して来たが，本遺跡をのせる台地は，発寒川扇状地堆積物によって構成されており，基盤，遺物包含層ともに人頭大からこぶし大に至る玉石，砂利が混り合った礫層となっており，ローム層が基盤をなす遺跡を発掘しなれた我々にとっては，全く未知の遺跡であった。

遺物包含層，基盤ともに砂利，玉石を多く含んだ礫層の為，発掘調査は予想外に困難をきわめ，スコップ，移植ゴテ等を使用する従来の人手を主体とする発掘作業では，能率も非常に悪く，発掘器材も大きな石に当って破損が著しく使用不能となるものすら出現する程の悪条件であった。為に最終的には，ブルドーザ・バックホーといった重機械力を導入し表土層の剝土作業の大半を委ねるに至った。

遺跡の発掘作業に表土除去といえども重機械力を用いる事は，種々の批判もあるであろうが，本遺跡のように大部分の遺物包含層が流失し，礫層という特に劣悪な条件が重なった場合等については，有意な方法であろう。

劣悪な条件の遺跡ではあったが，本遺跡では，台地の西側にそって続縄文時代末期の19個の土壙墓が非常にしっかりした形で検出されている。

副葬品と考えられる土器等の検出されたピットは内3個と少ないが，その規模・プランとも土壙墓としての機能を充分に果すものである。

かつて重松氏は，本道における墓址に関しての論を集成し，土壙墓等の取り扱いについて特に報告書の問題点を数々指摘している。

しかし，ごく最近に出版された報告書の中には，当該時期の土壙墓の報告書に関して，墓壙の配列を含んだ地形図，セクション図といった基本的資料すら割愛し，報告書としての体裁のみととのえたといった欠陥報告書がみられる。また明確な資料の提示もなく，単なる思い付きとしか解されない，墓域，埋葬頭位に関する論考すら存在している。

特に，続縄文時代の研究は，墓の研究を通して発展して来たという特殊な状況がある。基本的な報告資料の割愛がなされているような状態がまだ続くならば，続縄文時代の全般的研究等望むべきもない。

また最近新聞誌上において報道されたが，合葬墓の研究について日本書紀等の文献記録との関連を考える等，新しい視点もある。

特に破壊を前提とした緊急調査においては発掘調査は，その記録に万全をきたさなければならないのは当然である。また報告書に関しても，いかに資料を網羅し掲載するか，報告者の責任は重いものがある。

現時点においては，報告書作成に関しては明確な規準は存在していない。

先にも記したが，日本書紀等の文献記録との関連も指摘された合葬墓に関する新しい視点等を単なる思い付きとしない為にも明確な資料を研究者に提示する事が第一であろう。

報告書作成に関しても，整理の問題，予算等もあるが，報告書としての形式のみととのえるといった安易な事を行うのではなく，研究者の側に立ち，資料を提示するといった最低限の基準を報告者自身が自確しなければならないだろう。

札幌市においては，4年有余にわたって埋蔵文化財の調査が行われ，遺跡の発掘報告書も，本書で17冊目を数え，その内容においてもいささかマンネリ化して来たのではといった反省もある。

今後ともに，初心にたちかえりより精査な調査にもとずく，報告をなして行きたいと考えている。

（羽賀　憲二）

引用・参考文献

愛下　淳・橋本　晋他　1975『新冠町氷川遺跡』

石川　徹・金山哲夫　1970「縄文文化晩期後半の住居址－千歳市駒里遺跡の概要」『北海道考古学』6所収

石川　徹・佐藤一夫他　1971『ママチ遺跡』

石橋孝夫他　1975，1976，1977『石狩町八幡，ワッカオイ地区遺跡発掘調査報告書』Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ

上野秀一編　1976「T 210遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIII

加藤邦雄編　1976「S 153遺跡」『札幌市文化財調査報告書』X

加藤邦雄　1976「遺物，縄文晩期末～続縄文期（第Ⅲ，Ⅳ群土器）」『札幌市文化財調査報告書』XIII所収

木村英明　1976「続縄文文化の生産用具」『どるめん』10所収

河野広道　1933「北海道江別町円形竪穴式墳墓発見の石器時代－頭骨とその埋葬状態」『人類学雑誌』所収

小林達夫　1974「縄文世界に於ける土器の廃棄について」『国史学』第93号所収

後藤寿一　1935「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について」『考古学雑誌』25－5所収

後藤秀彦他　1975『十勝太若月－第3次発掘調査－』

佐藤忠雄・田沢厳他　1959「知床半島チプスケ遺跡」第1次発掘調査報告

佐藤忠雄　1966『幌倉沼の墳墓』

佐藤達夫　1972「栄浦第2遺跡ホ住居址」『常呂』所収

沢　四郎　1969「釧路川流域の先史時代」『釧路川』釧路叢書11所収

沢　四郎　1974「縄文時代の釧路」『新釧路市史』1所収

沢　四郎・富水慶一　1966「オンネチカップ（西庶路）遺跡調査報告」『北海道白糠町の先史文化』1所収

沢　四郎・西　幸隆他　1974『釧路市貝塚町1丁目遺跡調査報告－第4次調査－』

沢　四郎・河野本道他　1975『釧路市桂恋フシココタンチャシ発掘調査報告』

重松和男　1971，1972「北海道の古墳墓について」『北方文化研究』5，6所収

鈴木克彦　1973「第Ⅶ章亀ケ岡遺跡出土の遺物」『亀ケ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集，所収

芹沢長介　1960『石器時代の日本』

高橋和樹・内山真澄他　1976『瀬棚南川遺跡』

高橋稀一・野村　崇　1972『妹背牛町メム川遺跡』

高橋正勝　1975『後北式土器実測図集』

高橋正勝・藤本英夫　1971『柏木川』

竹田輝雄　1969「縄文晩期文化－北海道－」『新版考古学講座』3所収

千代肇編　1973『西桔梗』

野村　崇　1962「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史』下巻所収

野村　崇　1964「栗山町鳩山墳墓遺跡（鳩山第3地点）の発掘調査」『栗山町の文化財』所収

野村　崇　1965「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」『石器時代』7所収

羽賀憲二・内山真澄　1977「S 267・268遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIV

藤本英夫　1961 b　「大狩部第1地点の墳墓遺跡」『せいゆう』6所収

藤本英夫　1961 a　「北海道日高国新冠大狩部の墳墓遺跡－第1次調査－」『古代学』9－3所収

峰山　厳他　1971『天内山』

森田知忠　1967「北海道の続縄文文化」『古代文化』19－2所収

横山英介　1977『北海道石狩郡石狩町紅葉山43号遺跡』

吉崎昌一　1975「縄文文化の発展と地域性－北海道－」『日本の考古学』Ⅱ所収

追加

森田知忠・畑　宏明他　1977『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』

第3表　N199遺跡土壙墓計測表

番号	平面形	規模(壙口) cm	深さ cm	配石 有無	配石 位置	長軸方向	遺物 土器	遺物 位置
1	楕円形	79 × 67	20	○	壙口，覆土	北西－南東	後北 C_2	壙底面
2	円　形	81 × 81	26	○	覆土，底面		後北 C_2,D	壙底面
3	円　形	70 × 69	31					
4	円　形	92 × 90	49	○	壙口，底面			
5	円　形	59 × 58	45	○	壙口			
6	円　形	60 × 59	20					
7	楕円形	91 × 81	26	○	覆土	北西－南東		
8	円　形	61 × 60	17					
9	円　形	77 × 74	17					
10	円　形	70 × 68	25	○	覆土			
11	円　形	73 × 70	18	○	覆土			
12	円　形	77 × 70	21					
13	円　形	72 × 69	34	○	壙口，底面			
14	円　形	80 × 76	26	○	壙口～底面			
15	円　形	78 × 77	30	○	壙口～底面			
16	円　形	75 × 62	17	○	壙口～底面			
17	円　形	67 × 62	11	○	壙口～底面			
18	円　形	66 × 64	14					
19	円　形	77 × 65	34	○	壙口～底面		後北 C_2	配石中

第4表　石器類計測表

図版番号	出土地区	類別	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
1	B－V	石鏃	26	15	3	0.8	obs	有茎
2	B－III	〃	(25)	11	5	(1.1)	〃	有茎，尖端欠損
3	表　採	〃	18.5	9	4	0.5	〃	有茎
4	表　採	〃	(19)	14	4	(0.8)	〃	有茎，尖端欠損
5	A－V	〃	(20)	12	4.5	(1.1)	〃	尖端破片
6	C－VIII	〃	20	12	4	0.6	〃	
7	C－VIII	銛先	(22)	(19)	(5.5)	(1.3)	〃	柄部破片
8	B－II	〃	(19)	(15)	(5)	(1.6)	〃	刃部破片
9	D－IX	削器	14	21	5	1.2	〃	
10	E－III	〃	26	23	6	4	Har-Sha	
11	A－III	〃	52	21.5	6	4.5	〃	
12	B－VI	石匙	(60)	33	10.5	23.3	〃	つまみ欠損
13	B－I	削器	46	30	10	8.4	〃	
14	B－III	〃	55	30	9	11.3	〃	
15	表　採	石斧	(40)	47	10	26	Bl-Sch	刃部破片
16	表　採	〃	(35)	47	16	24.8	〃	〃

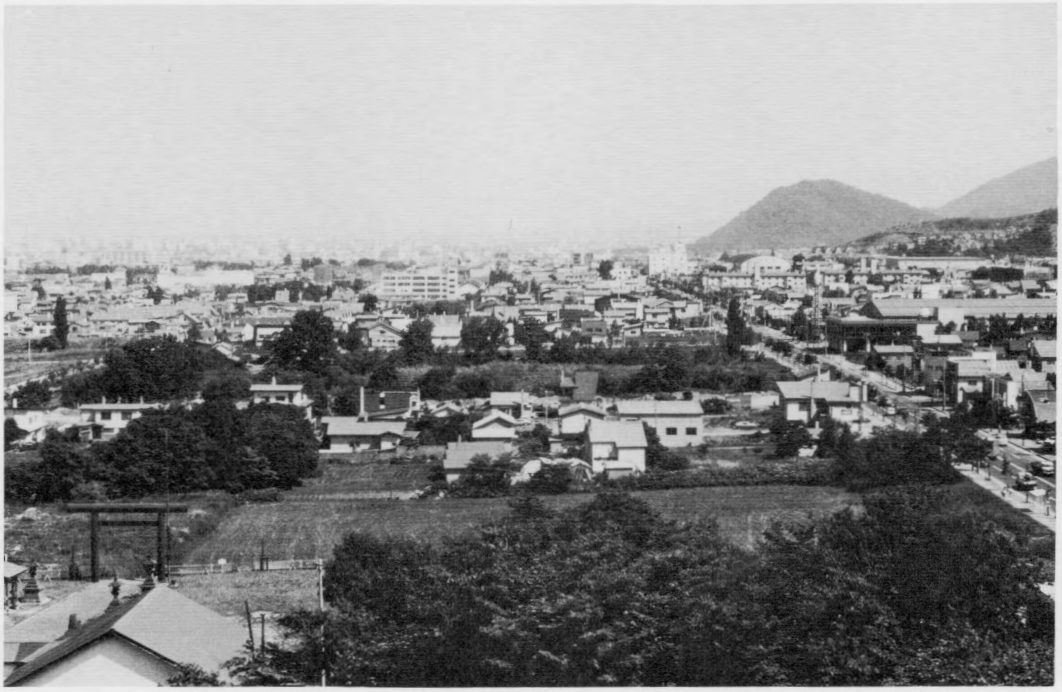
石質略号
Bl-Sch(Black-Schist)：黒色片岩
Har-Sha(Hard-Shall)：硬質頁岩
Obs　(Obsidian)　　：黒曜石

図　　版

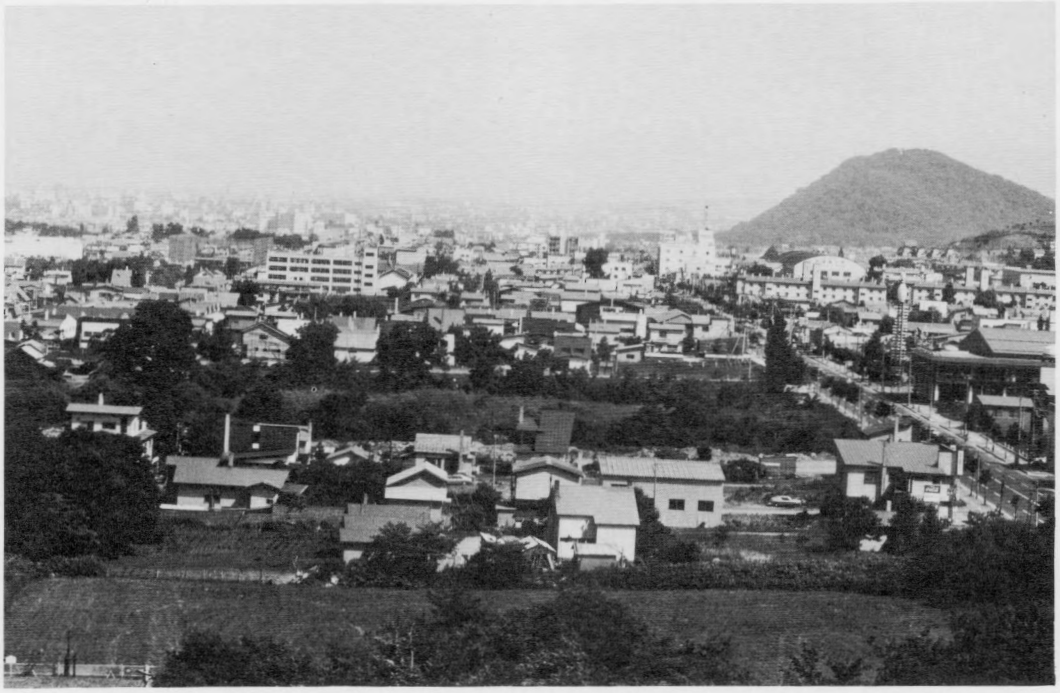
完形土器　縮尺約1/3

土　　器　縮尺約1/3

石　　器　縮尺約1/2



A　遺跡遠景（西より）

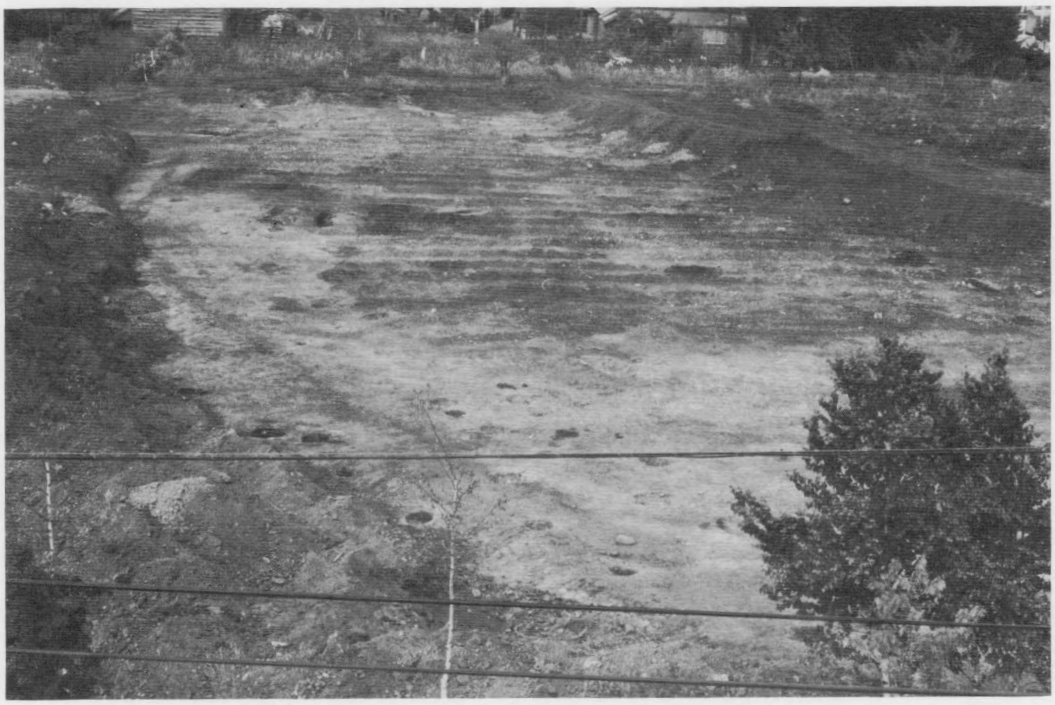


B　遺跡遠景（西より）

遺跡全景　（発掘区配置，発掘状況）

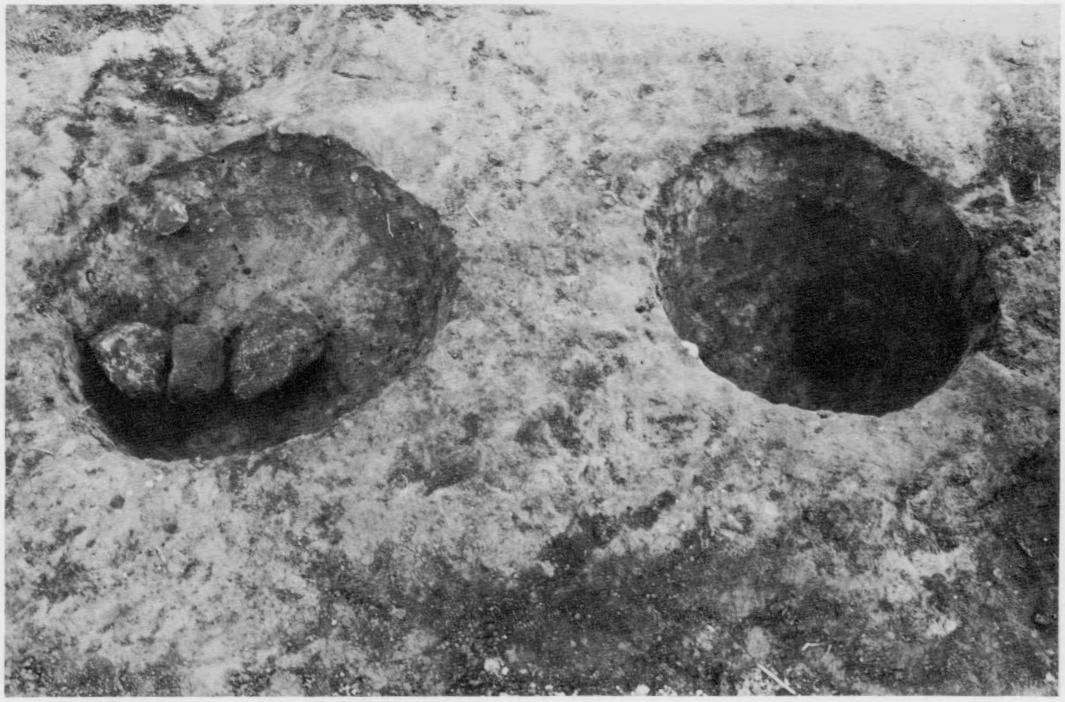
図版2

A　発掘状況（南より）

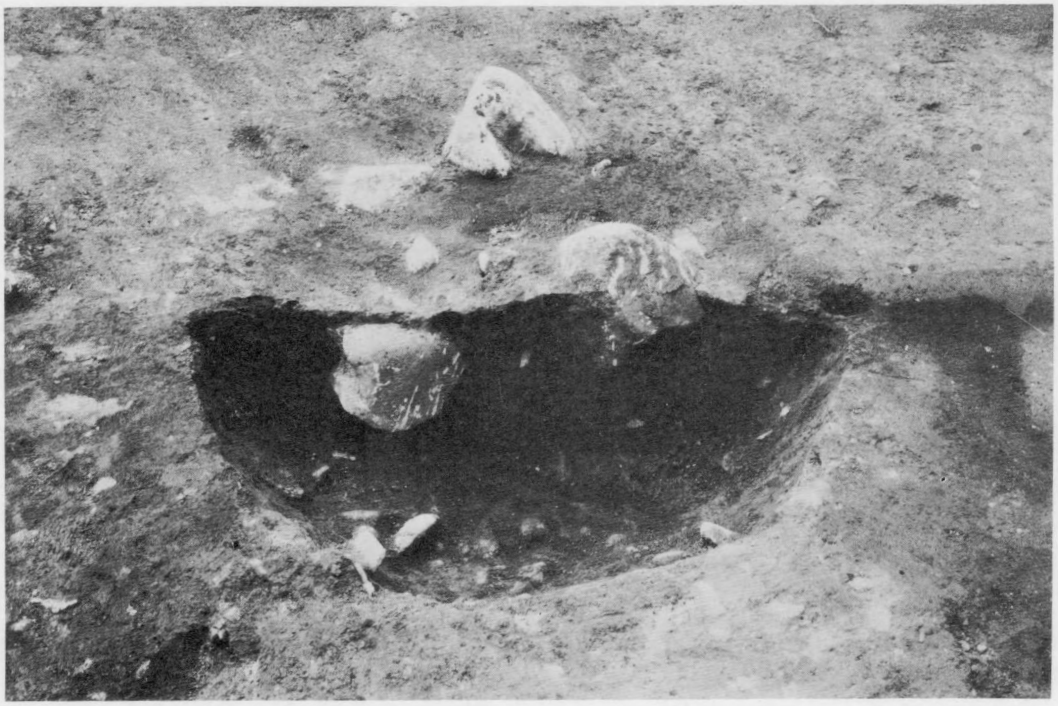


B　発掘完了

A　発掘区土器出土状況

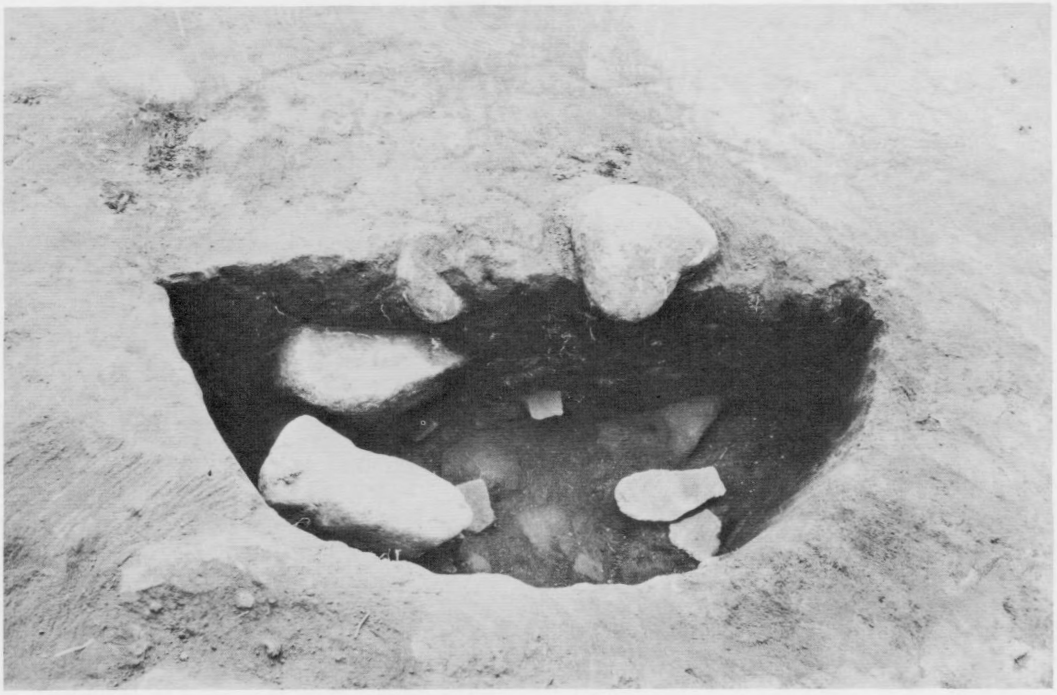


B　第13，14号ピット（南より）



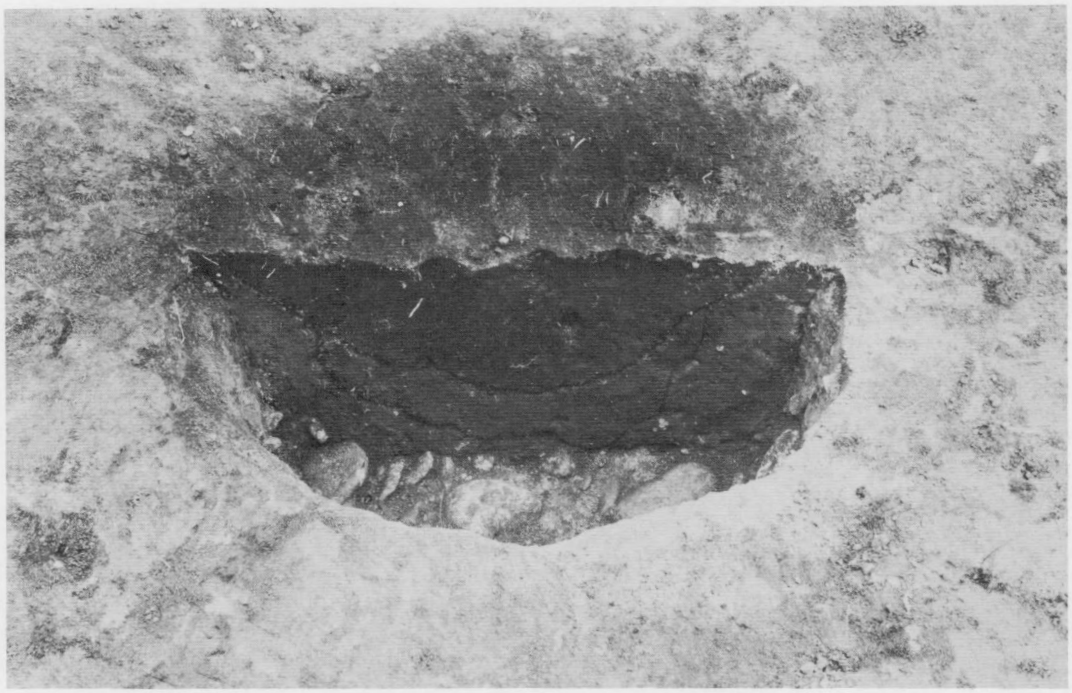
A　第1号ピットセクション（東より）

B　第1号ピット（東より）

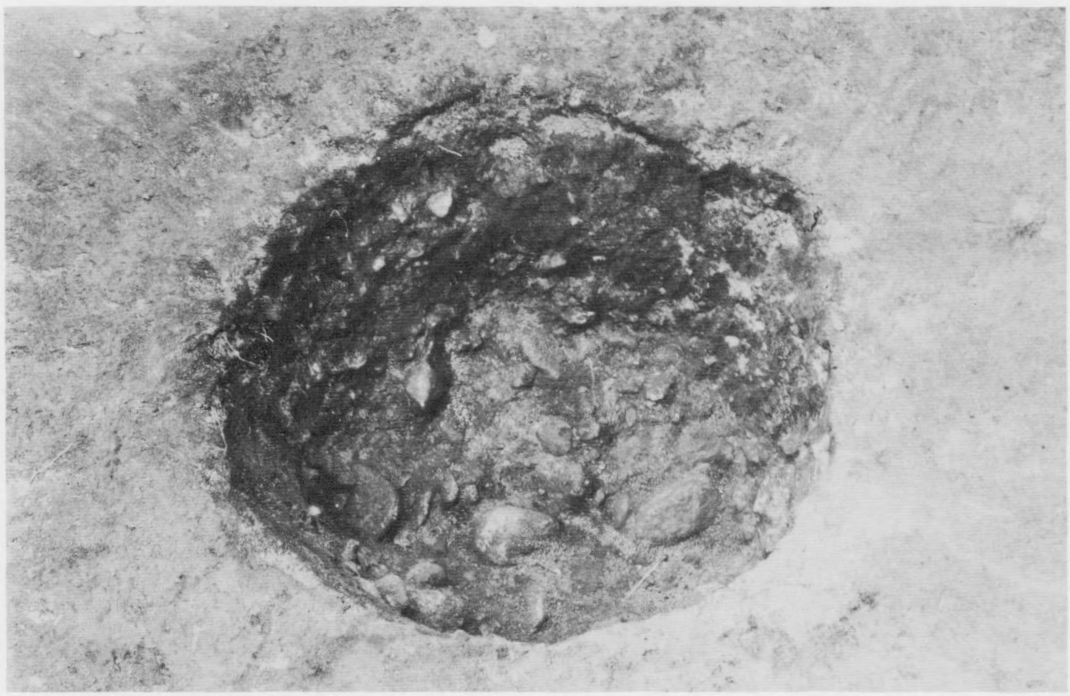


A　第2号ピットセクション（東より）

B　第2号ピット（東より）



A　第3号ピットセクション（東より）



B　第3号ピット（東より）

A　第4号ピットセクション（東より）

B　第4号ピット（東より）

図版9

A　第5号ピット（南より）

B　第7号ピット（東より）

C　第8号ピット（東より）

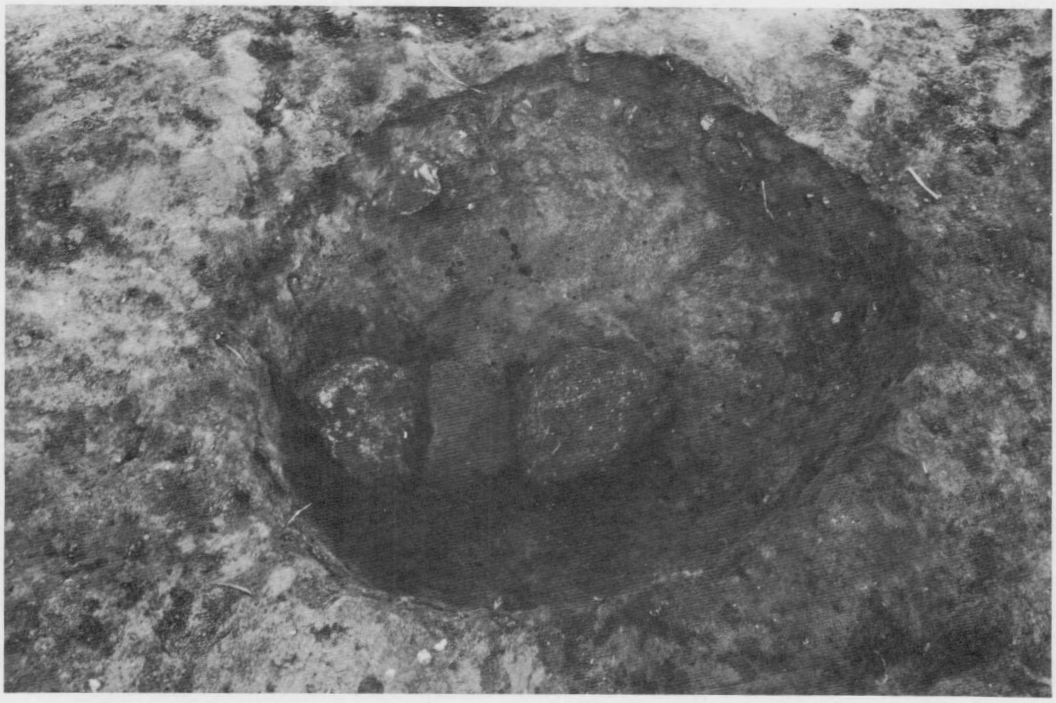
A　第9号ピット（東より）

B　第10号ピット（東より）

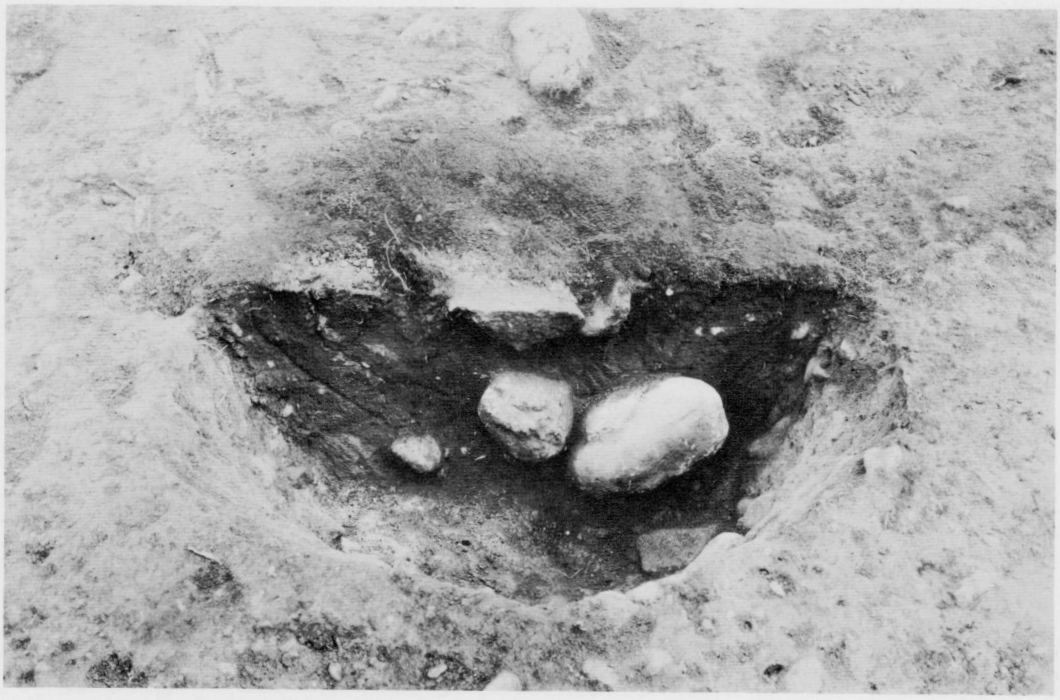
A　第13号ピットセクション（南より）

B　第13号ピット（南より）

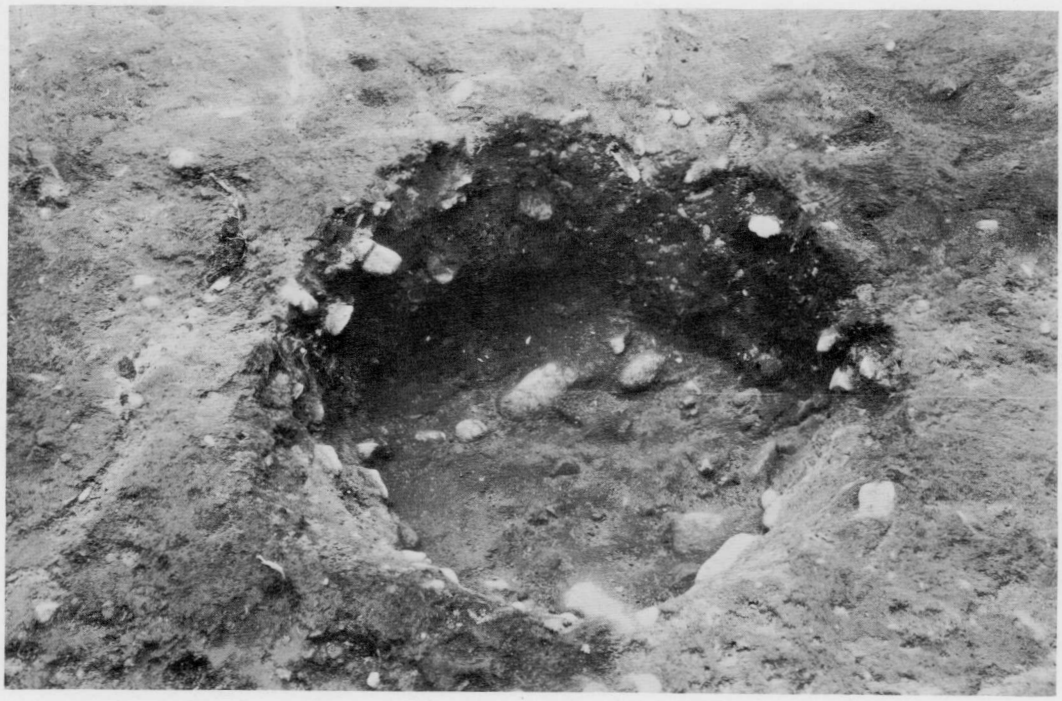
A　第14号ピットセクション（南より）



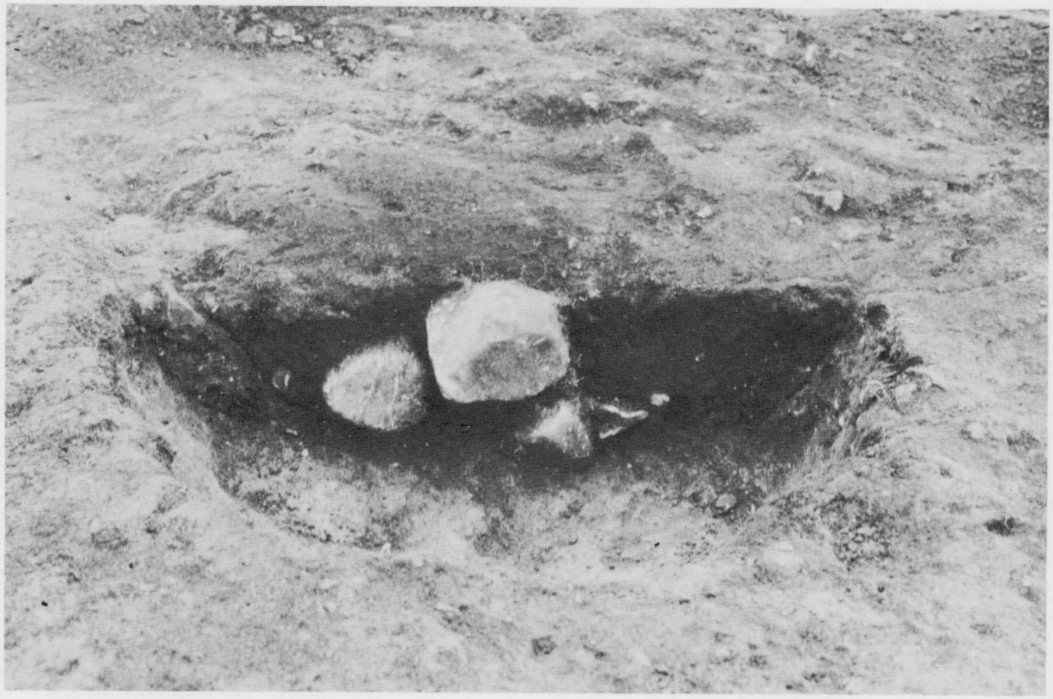
B　第14号ピット（南より）



A　第15号ピットセクション（東より）



B　第15号ピット（東より）



A　第16号ピットセクション（東より）

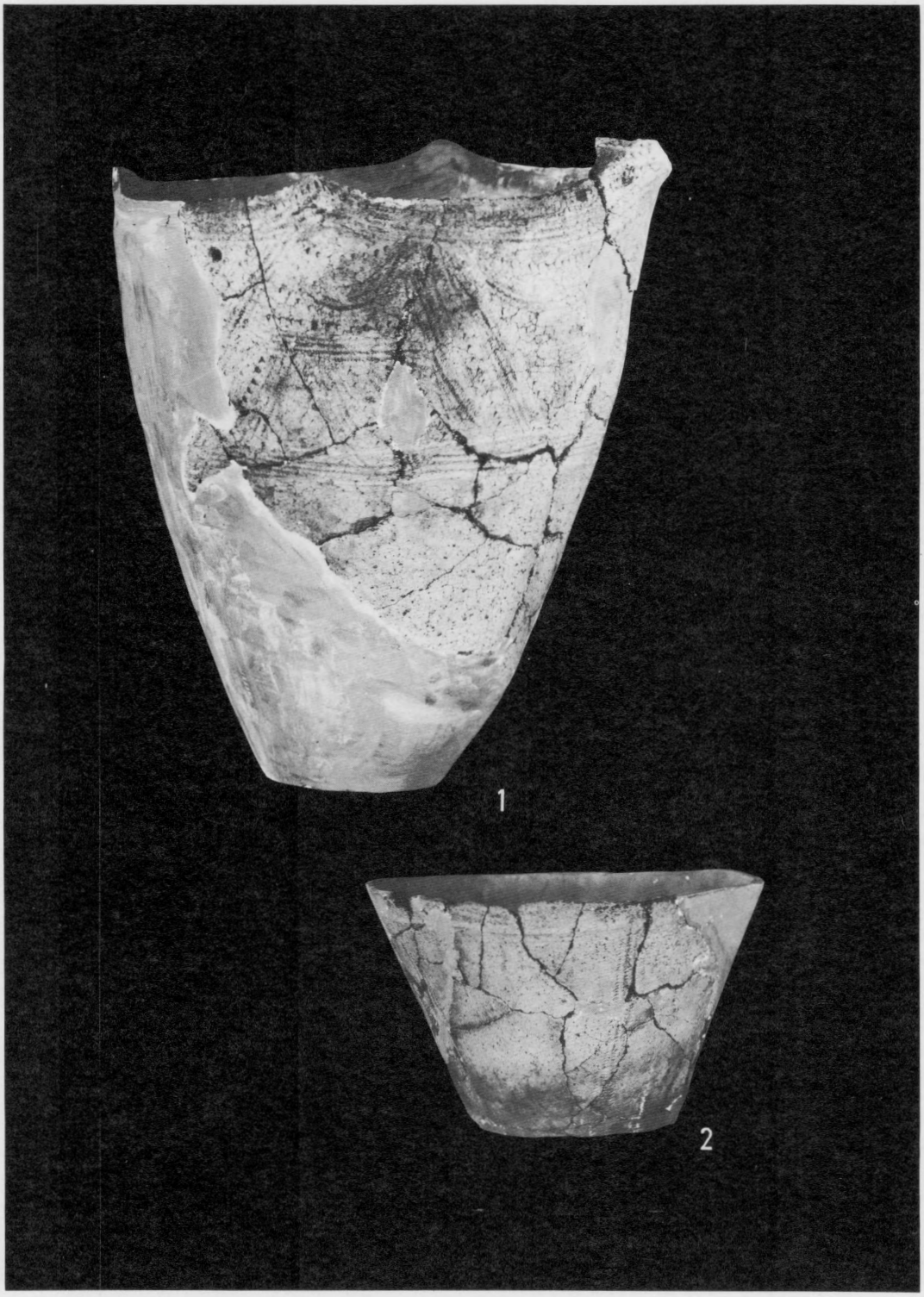
B　第16号ピット（東より）

A　第17号ピット（東より）

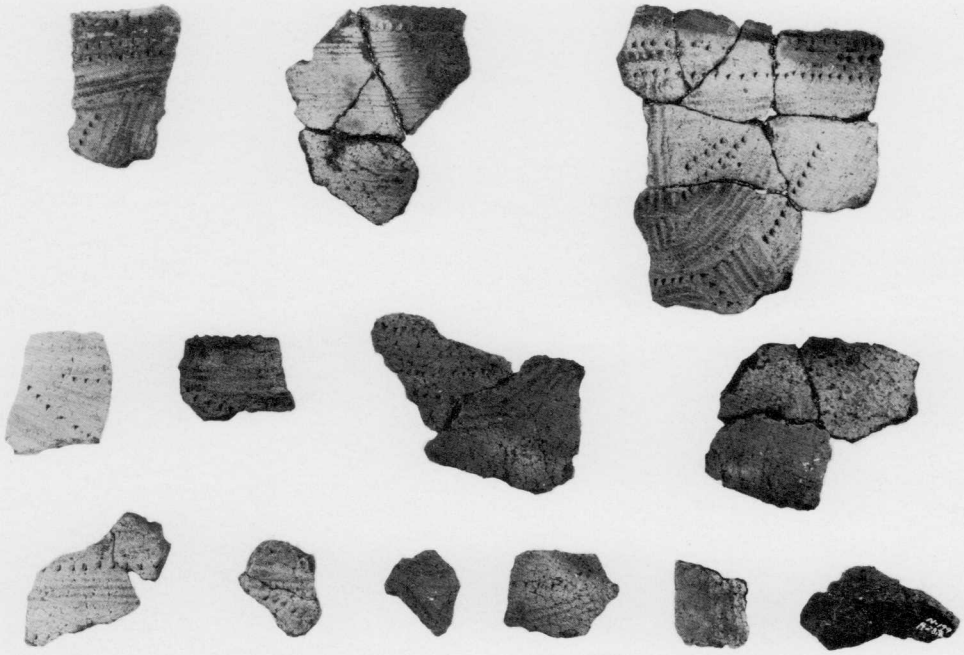
B　第18号ピット（東より）

A　第19号ピット（東より）

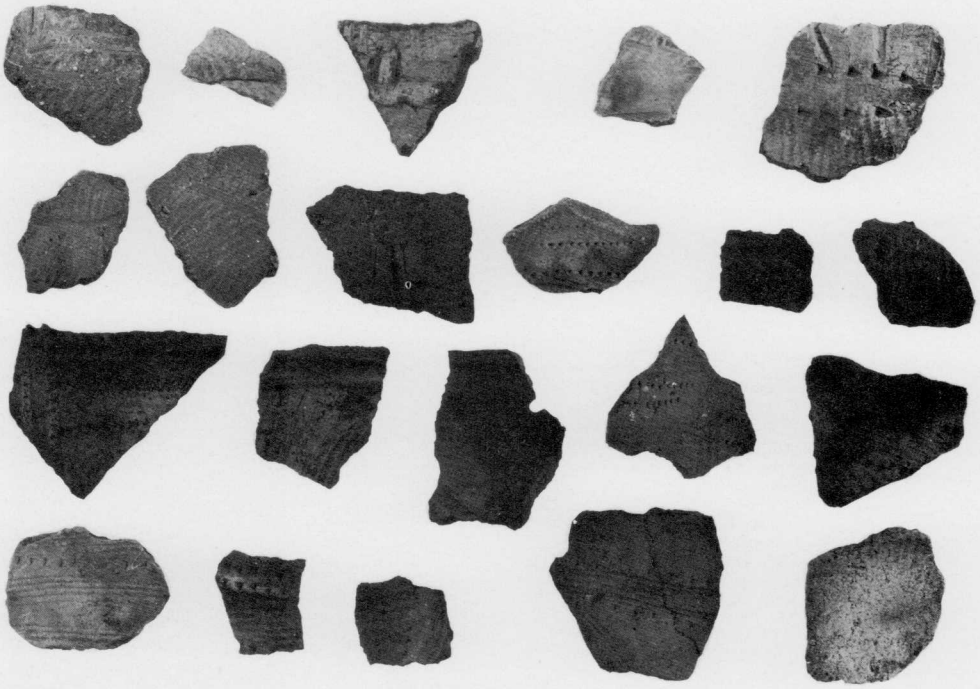
B　第19号ピット（東より）



土壙墓内出土土器（ 1,2号,2,19号 ）

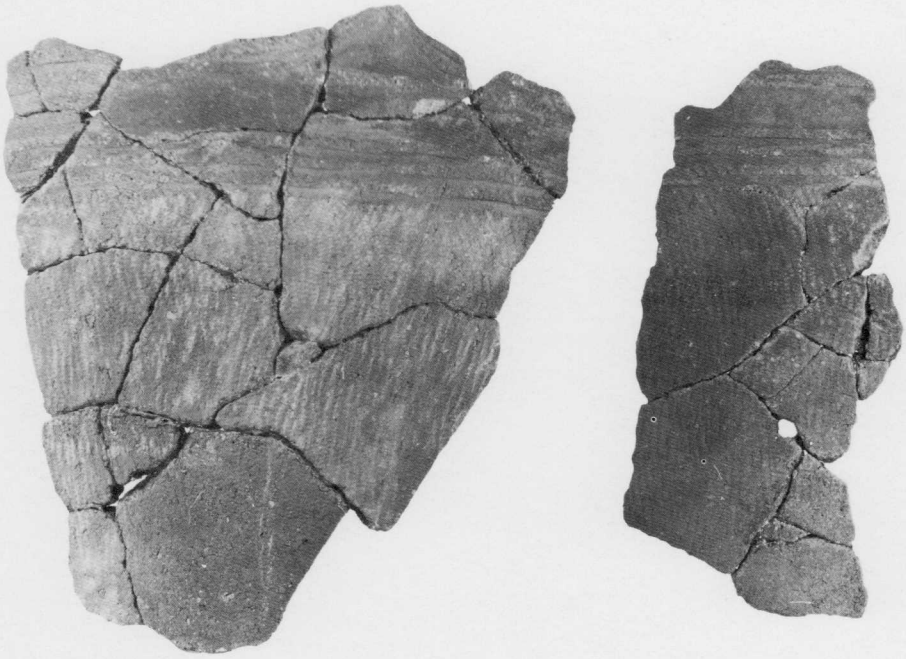


A　土壙墓内出土土器（上段１号，中・下段２号）

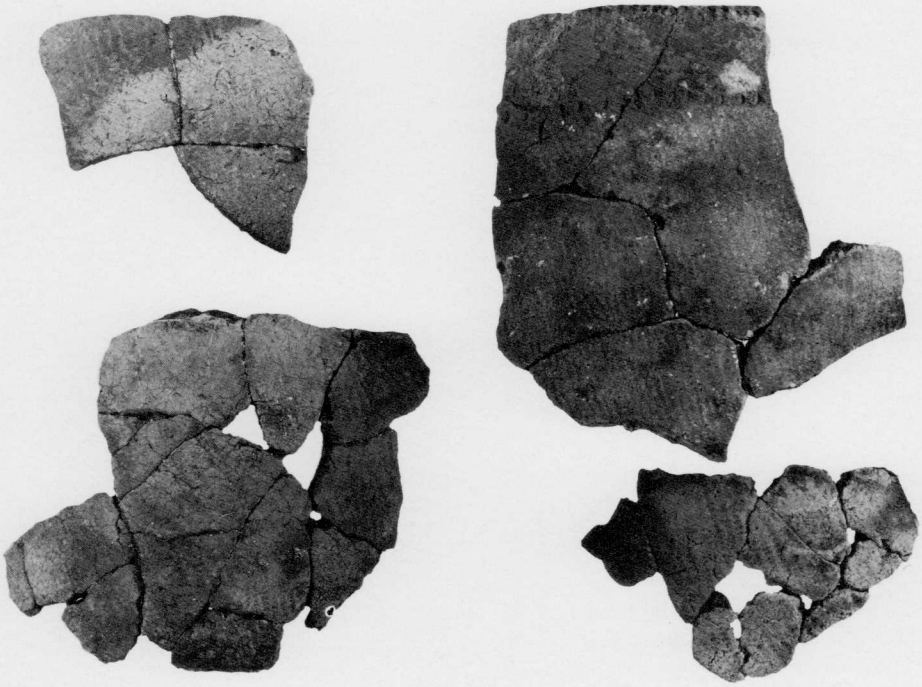


B　発掘区出土土器

A　発掘区出土土器



B　発掘区出土土器



A　発掘区出土土器

B　発掘区出土土器

A　発掘区出土土器

B　発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書　XVII

N 199　遺　跡

昭和52年7月25日印刷
昭和52年7月30日発行

発行者　札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目
印刷所　(協)　高速印刷センター
札幌市中央区北4条西3丁目
北洋相銀ビル6F
TEL 271—5101